

が絶えず茶を運んだり、側へ来て煙草を取つてすゝめたりする。日本煙草の朝日だ。一本吸ひ了ると、直ぐあとを取つてすゝめマツチを摺つて呉れる。對談中煙草を休む暇がない。ボーイが何かでちよつと外した時など、將軍自ら起つて来て煙草を取つてすゝめた上に、マツチを摺つて呉れる。客を遇すること實に懇切だ。

張海鵬將軍は約二萬ばかりの軍隊を率ゐて熱河へ來てゐる。がその軍隊は殆ど承德にはゐず近在は散宿してゐる。將軍は現在軍職以外省長の職務を執行してゐるが、省公署の方へは殆ど顔を見せないで警備司令部にばかりゐる。しかし熱河の政治工作は甚だむづかしい。その上治安維持の點においても、將軍自ら正直に

「日本軍がゐて下さるから、お蔭で治安も維持されてゐる」と告白する通りだ。

張海鵬將軍に對する評判は、「正直な人だ」といふのが定評のようだ。それだから一般に好感をもつて迎へられてゐる。この好々爺をして錯雜した政治の難局に當らせることは氣の毒である。自身もまた、煩はしいことは一切人々に任せて、ただ黙つて、あの廿五、六貫の巨體を下ツシリと上の方に坐らせてゐることが、將軍をしてさらに大ならしめる所以だと思ふ。

私が記念の揮毫を求めると、將軍は「非常に拙いがいゝか」と斷つて「共存共榮」と大きな紙へ書いてくれた。

私は丁度一時間、この老將軍を相手に喋つたり話を聽いたりした後、暇を告げると、將軍はわざわざ家の外まで出て見送つてくれた。

## 蘇州遊記

一八八

十一月九日である。

私と歐陽予倩君は、午前八時五十分上海發南京行の列車へ乗った。切符は二等を買ったが二等室が満員のために其の切符で一等室へ入れられた。一等は四人が定員の小室である。合室に五十位の年配の紳士がゐたがそれは予倩君が知り合ひの人だった。

昨日まで上海は非常に暖かだったが今朝は急に寒くなった。予倩君は厚い外套を着て襟巻まで用意してゐるが、私は間服で外套も一重の薄いやつなので身内が冷々して心細かった。

ボーイが註文を聞きに来る。私はまだ何も食べてゐないので、コーヒ、トースト、フライエグス、などを取り寄せた。私は歐陽予倩君と一緒に旅行をするのは今度が初めてであるが同君は非常な寛厚な人だから、我儘者の私にとつては大變都合のいい相手である。私は何も彼も予倩君に委せてゐればよいのだ。私達は演劇の話や、友達の話や、いろんな話をしてゐるので退

屈することはない。前に居る紳士は予倩君が流暢な日本語を話すのを感じたやうに眺めてゐる。上海の田漢の噂を二人でさんぐした。定めて田漢が今朝はクシヤミをしてゐることだろう。どの道彼に關する噂だからさう好い噂をする筈はないのである。予倩君は近ごろ近松門左衛門を研究してゐると云つた。來年あたりは近松の作品を一つ二つ翻譯して見るつもりだといふ。

そんなことを喋つてゐる間に汽車は蘇州へ近くなる。洋燈(陽)湖が見える。餘り大きい湖ではないが江南には珍らしく水が淨い。此の湖は蟹の産地として名高い。

十時少し過ぎに蘇州へ着いた。私達は此處で下車して驛の前から馬車を一臺傭つた。無蓋馬車で乗つた氣持が大變いい。彼方に城壁が見えてゐる。道路の端に柳が植えてある。少し行くと古い壁の住宅や、宣教師でも住んでゐさうな赤煉瓦の建物などがある。運河が通つてゐる。見覚えのある落ち着いた蘇州である。十五六丁行くと城外の繁華な街へ着いた。其處には大きな旅館が幾軒も並んでゐる。私達は蘇州飯店といふ家へ入つた。洋式の綺麗な宿屋だ。二階の房へ通された。

予倩君は門人が一人此の土地にゐるので其處へ手紙を持たせてやつた。それから私達は近く

の大慶樓といふ茶館へ午飯を食べに行つた。古い大きな家である。二階の陽當りのいゝ處へ陣取つた。二階の中央が四角に空いてゐる。其處から見下すと階下の料理場のあたりがすつかり見える。料理場は非常に廣くて十數ヶ所に煮たきをする場所があり、各々料理人が一場所宛擔當してジャ／＼と物を煮てゐる。大規模なものだ。

私は寒さしのぎのつもりで老酒を飲み料理をたらふく食つた。さつき見た洋腸湖の蟹の料理も出た。少し酔つた。

「歐陽さん、今日私は一つ註文があるのですが」

「何んですか」

「後藤朝太郎氏の書いた物に、蘇州城外の運河に舟を泛べて懐古氣分を味はふといふのがありました。後藤さんの文章もよく書いてゐたが、大變面白さうです、私もそれを一つやつて見度いんですがね」

「いゝでせう」予情君は直ぐ様賛成した。

「今から一寸見物をして其のあとで船へ乗ると丁度いゝ、ついでに船へ藝者を呼びますかな、一寸した料理でも取つて」

「さうなれば一段と一等ですな、ぢやあさういふことに御心配を願ひます」

「いまに私が呼びにやつた男が來ますから、其の男にやらせませう。屹度面白いですよ」

予情君も大に乗氣になつて云つた。後藤さんの文章によると、運河へ船を泛べて遊んでこそ初めて蘇州の情調がわかる。諸國の民船が水上に泊してゐていろ／＼な言葉で話し合ふたり、國々の歌を歌つたりする。河に沿ふた家から胡弓の音が聞えたり、女が半身を現はしたりする。あらゆる懐古趣味が運河の滑らかな水の上へ溶け込んで來る——さういつた文章の上の情景の私を思ひ浮かべて、自分もそれと同じ事を経験することができると思ふとおのづから心が慄へるやうな楽しさを感じるのであつた。

大慶樓を出て宿へ歸つて來ると歐陽さんの門人がすでに來て待つてゐた。龔キヤウさんといふ溫和しい人で、齡も私達より三つ四つ若いやうだ。龔さんは以前俳優を志して予情君の弟子になつたが、途中で其の方はやめて現在は故郷のこの土地の劇場で會計係か何かを勤めてゐる。それでも時たまは脚本なども書くさうだ。龔さんが今日の案内役である。

さて見物に出掛けやうとすると、私は空腹の處へ老酒を飲みおまけに食べ過ぎたせいで少し胸がムカついて來た。思ひ切つて二本の指を咽喉へ突つ込んで胃袋へ溜つてゐる物を嘔いてし

まふと少し氣持がよくなつた。

「大丈夫ですか」

「え、もう大丈夫です」

三人で出掛けた、旅館の前から黄包車ワンボツに乗つた。今日は城外を見物する豫定である。櫻の並木のある廣い道路がある。其の邊は日本租界だ。先年私は此の土地へ來たことがあつたが、其の時は朝の四時頃着いて、八時頃には汽車で發つてしまつた。何一つ見物することが出來なかつたが、其の時二三時間休ませて貰つた日本旅館が此の邊にある筈だと思ひながらあたりを見廻したりしたが六年前の記憶はおぼろだつた。

龔さんは最初に二つ三つ寺を案内した。さしたる寺でもなかつた。私は胃袋にまだ残物が溜つてゐたのを、其の寺の庭園で嘔いた。そのあとで有名な留園へ行つた。これは聞きしに勝る宏大な名園だつた。此の留園は故人になつた盛宣懷氏の持ち物で、いまでも其の遺族の所有である。其の園一つが一千万と評價されるさうだ。建築は大部分が回廊に費されてゐる。それほど回廊に力を注いである。池の端には石ばかりの山が築かれてある。池に千鳥に石の橋が架けてある。とにかく規模宏大なものである。園の一隅に小邱があり、頂上に祠を祀り、老樹鬱

蒼としてゐる。其の下に土塀が連なり道路を越えて塀の高い一構えの家屋が並んでゐる。それは尼寺ださうだ。或男が毎日此の山の上から彼方を見てゐて一人の若い尼と意を通はせ塀を乗り越えて侵入した、そしてどうやらした悲劇が生れたといつたやうな話を、予情君は私に話した。

此處を出て私達は虎邱へ向つた。其の邊は野原とも畑とも住宅地ともつかぬ荒地でごく狭い路しかない。それが至つて凸凹してゐるので車に乗つてゐるのも大變なくらゐである。私達の車夫は三人とも二十前後の若者だから皆威勢がよい。キャツ／＼と騒ぎ乍ら無闇に驅ける。道のある無しに頓着なく驅ける。一人の車夫が走り乍らカップと啖を吐いたのが風に煽られて車上の歐陽予情君の顔の方へ飛んでいつた。

「ウェイー」予情君は車夫を叱つて手巾で顔を拭き／＼した。

そのうちに「ウアー」といつて車を止めたから見るとこはいかに、私の乗つてゐる黄包車ワンボツのタイヤが外れ中から赤味を帯びたチューブが大きな瘤のやうになつてふくれ出してゐる。それをどうにかかうにか元のやうに押し込んで又駆けずり出した。

「大丈夫か」

「大丈夫だ、何、パンクしたつて構はない」

と車夫は云ふ。奴は構はないか知らないが、乗つてゐる身になるとどうも危険である。今にも破裂しさうな氣がしておち／＼乗つてゐられない。變な處ばかり通る。やつと四尺位の道幅の町があつたりする。高い壁と壁の間を縫ふやうにして通り抜けたりする。やがて運河の岸へ出た。河の幅も五六間しかない。其の河幅一杯に家が立つてゐるが、片側は屋根の下が道路になつてゐる。問屋らしい店が並んでゐる。處々に石の橋がある。アーチの下から船が出たり入つたりしてゐる。其の橋を渡つて向ふ河岸を何處迄も走つて行く。河の幅が段々廣くなつて對岸の方は大きな邸宅のやうなものばかりある。邸の中には落葉した老樹がそびえ、河岸には形のよい柳が立つてゐる。白い壁が靜かに水面に映じてゐる。あたりを民船がゆつくりと動いてゐる。さうした晝趣と相對してこちら側は思ひ切つてゴミ／＼した汚ない町通りになつてゐる。苦力相手の茶館がある。古道具屋、鍛冶屋、下等な飲食店。道ばたに石の唐獅子がある。石造の古い牌樓が立つてゐる、驢馬が通る、苦力共が銅幣で賭博をやつてゐる、鶏が群れてゐる。老人、子供、犬、猫——方々で内職に小麥の藁を編んでゐる。編んでゐるのは多く子供である。支那のゴミ／＼した汚ない町が私は好きである。立派な大通を歩くよりも好きである。

何故かと云へば、さういふ町には彼等の生活がすつかりと往來から一と目で見られるやうに流露してゐる、それが面白いのである。

虎邱寺は支那のすべての名所がさうであるやうに甚だしく荒廢してゐた。門内の道路は兩側に雑草が生ひ茂り、土塀は崩れ／＼ば崩れた儘で潰えてゐる。けれども立派な寺があり、古い塔が立つてゐる。岩石の洞窟のやうな處に小さな深い池がある。その池を劍池と云ふ。十間四方ばかりの平地があるがその地床は一枚石で出来てゐる。爰へ人を集めて名僧が説法をした講臺石といふがある。其の時附近の岩石悉く點頭したといふ。いつ頃の事か知らぬが此の一枚石のお座敷で千人の人を殺したこともあるといふ。其の血が石にしみ込んでいまでも斑點が残つてゐる。

塔は山の頂上にある。古代煉瓦の建築だがいたく大破して頂きにも側面にも雑草や灌木が簇生してゐる。あたりは畑になつてゐる。側へ來て見ると餘りの荒廢しかたにそゞろ哀れを催すのみで結構莊嚴の觀はないが、然し廣々とした姑蘇の平野の眞ん中に只一つ高く聳えて見える此の虎邱塔の姿は蘇州全體の歴史を象徴してゐるやうに感じられる。

案内役の龔さんは晩に私達が乗る船のことについて寺から町の方へ電話をかけた。そ

のあとで望蘇樓といふ建物の二階で茶を飲んだ。門前に待たせてある黄包車ワンホップで歸途につく途中で又々私の車はゴムがふくれ出して來た。車夫は繩の切れはしを拾つて來てタイヤを繩で縛つた。其の手術をしてゐる間私は車から降りて立つてゐた。直ぐ側の家では四五人の女の兒が例の小麥藁を編んでゐる。其の中に十三四になる非常に美しい顔をした娘が一人まじつてゐた。其の子は着物も綺麗なのを着てゐた。以前の道を通つて蘇州飯店ソシュウファンテンへ歸つた。

## 二

私は前の晩の睡眠不足と晝間嘔いたりしたせいが大層疲勞を覺えた。夕景になると船に乗らなければならぬのでそれ迄休息することにして洋服を着た儘で寢臺に横たはつてゐた。さうするとトロ／＼眠たくなつた。

ガヤ／＼話し聲がするので眼が醒めた。女が二三人來てゐるらしい。そのうちに男の聲も聞えて、慌たゞしく人が出たり入つたりしてゐる。歐陽予倩君が頻りに何か云つてゐる。私は頭が重いので出て行くのも大儀で寢臺の帳を垂れたまゝ無關係を續けてゐた。

やゝ暫らくすると人々の話は何だか非常にもつれて來て聲が高くなり出した。予倩君が頻り

に陳辯してゐる様子だ。それでも私は構はずウツラ／＼してゐると、予倩君が側へやつて來て「Mさん、眠つてますか」

「いや、眼は明いてゐます」私は帳を少し引きしぼつて頭だけ擡げた。女達が一齊に私の方を見た。

「どうも困つたことになりました」

「さうらしいですぬ、一體どういふ話なんです」

「例の船のことですがね、いま爰へ來てゐるのは藝者屋の女達ですが、私達の考へた事と大變違つた話になつてしまつたのです。どうあつても百五六十圓掛ると云ふのです」

「それは法外ですぬ、一體何にそんなに掛るのでせう」

「船と藝者屋と兩方祝儀が要るんださうです、普通其處で麻雀マイジャンをやるのが慣例で、十二人の客として一人前三圓宛のテラ錢で一臺三十六圓が藝者屋の御祝儀です、それを二臺やつて呉れといふ要求です。麻雀マイジャンをやらなくても是れだけは貰はなければならんといふのです。船の方でも同じ事をしなければならん、それから別に藝者を十人位呼ぶ。これの祝儀が一人二圓宛掛る。他に料理が一卓二三十圓掛る。船の茶房ホワイの祝儀が要る。總計すると少くとも百五十圓か二百圓

位かゝるといふのです」

「大變な事になりましたね、いつたいどういふわけでそんな大掛りな話になつたんでせう」

「それがどうも腑に落ちないのだが、とにかく彼等はさういふ準備をしてしまつたと云ふのです。龔さんも其の話を聞いて駭いて何處かへ出て行きました。私の考へでは取りあへず一方だけでも破談にしようと思ふのですが、船と藝者屋とどつちを斷つたものですかね」

「藝者屋は全然無意味ですね、元來吾れ／＼の目的は船に乗ることにあるんですから、藝者屋へ行つて宴會をやつたり麻雀をやつたりしたつて始まりませんね」

「それもさうですね、ではともかくも藝者屋の方を斷ることにしませう」

さう相談したあとで予倩君は又女達の方へ行つて接衝し始めた。女達は口々に喧ましく喋り立てる。予倩君は三人の女を相手にして顔をポツと上氣させながら一生懸命辯解を試みて居る。やゝ暫らく其の複雑な談判を試みたあとで予倩君は再び私の處へやつて來て

「どうも弱りました。女達が承知しません。すでに料理も注文してあり、藝者も十人約束してあるから今更破約されては困ると云ふのです。それから船の話を聞いて見るとこれが又意外な話です。大體其の船は動かない船だと云ふんです。非常に大きな船で宴會をやるだけの船なん

ださうです」

「呆れましたね、動かない船に乗つたつて仕方がない、一體何のためにそんな船を注文したのでせう」

「それがよく分らないんですがね」

さう云つてる處へ龔さんが歸つて來た。其處で龔さんを隅の方へ呼んで尋ねて見ると大體事情が分つた。それはつまりかうである。龔さんは私達から船の事を依頼されたが實は彼も餘りよく知らないので、虎邱の寺から電話を掛けて或友人に此の事を依頼した。すると、頼まれた友人は丁度麻雀を始めた處で手が離されなかつた。「上海の歐陽予倩が來てかういふことを頼れたが困つた」と云つてゐるところへ來合せた人が「そんな事は譯ないことだ、私がやつて上げやう」といつて引き受けてしまつた。かうして責任者が次から次へと轉じていつた。最後に引き受けた人は是れを蘇州第一の藝者屋へ持ち込んだ。藝者屋は喜んで早速一番大きな船を豫約し料理も藝妓も手落なく準備をした上でサアお出で下さいと此の女達は私達を迎へに來たわけである。後で聞いた話だが蘇州には昔からかういふ遊びがある。勿論それは大金持のすることである。後で聞いた話だが蘇州には昔からかういふ遊びがある。勿論それは大金持のすることである。後で聞いた話だが蘇州には昔からかういふ遊びがある。勿論それは大金持のすることである。後で聞いた話だが蘇州には昔からかういふ遊びがある。勿論それは大金持のすることである。

ば藝者も只では置かない。其の代りお客のふところもなか／＼百五十圓や二百圓では濟まないといふことだ。予情君が名高い俳優であるだけに今回の藝者屋でも喜んで引き受けたわけであつた。後藤朝太郎氏の文章が今や私達に飛んだ災難を降り掛けて來た。私達の考へでは小さな船を備ひ、簡単な料理を運ばせ精々二三人の藝妓を聘して淺酌低唱の情趣を味はひたいといふのである。私が三井か岩崎の息子で予情君が袁世凱か盛宣懷の息子ならそんな事は何でもないが。二等の汽車へ乗つて歩く身分だから一大事である。龔さんも頻りに申し譯がないと云つて謝まつてゐるが元來猫みたいな溫和しい人だから自分で捌きを付けることは出來ない。

私と予情君は額を寄せて相談をした。本當を云ふと私達は此の儘尻に帆を掛けて遁げ出してしまひたいが、それでは間へ立つてゐる龔さんが後で困るだらうと思ふと逃げるわけにもいかない。仕方がないから火事に遇つたと諦めて藝者屋へ行くことにし、せめて動かない船だけでも斷ることにきめた。早速其のことを船宿へ云つてやると船宿の若い者が二三人でやつて來て大層な劍幕で怒り出した。年に何度といふ位しか使はない其の船だから掃除をするだけでも容易ではない、今更破約などは以ての外だといきり立つのを漸うなだめ、事情を話して解約することにし其の代り幾らか罰金を出さうといふことになる。と船宿の若い者は十二圓罰金を出せと

云ふのを謝りもんじゆして金六圓に負けて貰つて漸う此の方は手を打つたがさて厄介なのは藝者屋である。相成るべくは是れも御免を蒙り度いと思つたが女共は承知しない。そこで私達は今晚其の家へ行つて宴會を催すことになつた。

さて其の後が大變である。宴會をやるにはお客を招待しなくてはならない。歐陽さんは蘇州で知つてゐる限りの人へ招待状を書いたがやつと三四人しかない、處が運悪く其の三四人が皆不在である。そこで今度は龔さんが奔走して猫でも杓子でも構はないからとにかく七八つ頭数を揃へることになつた。私は寢臺に横たはつてゐたが益々頭が重いやうな氣がする。晝の持ち越しで胃の加減も宜ろしくない。此の旅の空で藝者屋へ行つて見ず知らずの人達を集めて宴會をやることを考へて見るだけでもウンザリする。けれども是れも身に掛つた災難で仕方がない。男子門を出れば七人の敵あり、況んや日本を離れて支那迄來てゐるのである。是れしきの義理を缺いて日本人の信用を落してはならんと思ふと俄に勇氣百倍して來た。さア欲しければ命でも首でも遣るぞといふ氣になつて威勢よく寢臺から飛び降りてネクタイを結び直した。

私達は日が暮れてから旅館を出て藝者屋の方へ行つた。城内へ入る少し手前に運河があつて橋が架つてゐる。河に沿つて横へ入ると、貧民窟みたいな煤ぼけた裏町がある。饅頭や麵を賣



る露店がカンテラをとぼしてゐる。暗い横丁を入つて行くと其處に妓館があつた。古色蒼然として山家の寺のやうな家である。先刻の女達が待つてゐて流石に愛相よく客間へ案内する。客間は可成り廣くてそして外の見掛けによらず存外清潔で整頓してゐる。壁間には額や對聯が掛けてある。洋風の事務机が隅の方に据へてあつたりする。此の家の主人公の名前は雪麗玉と云ふんださうだ。對聯の句を讀んで見ると

雪容冷淡花容麗

玉容玲瓏珠容圓

と書いてある。更に驚くべきことは正面の高い處に「花國大總統」と書いた某書家先生の筆で造花で縁を飾つた額が上つてゐる。これは何のことかといふと、毎年此の土地の新聞社の主催で藝妓の人氣投票が行はれる、其の時最高點に當選した者が花國大總統の稱號を贈られるのである。古來蘇州は支那第一の美人の産地である。その蘇州の花國でわが雪麗玉は大總統とあるんだから、取りも直さず四百餘州第一の名花だといふことになる。支那第一の美人のお客になれば百圓や二百圓使つたつて惜しくはない。私は船に乗り損ねた後悔などは忘れてしまつて急に愉快になつた。

「とにかく大總統だから偉いものですね、これがあなた袁世凱とか段琪瑞とかいふ大總統ならなか〜我れ〜拜謁は叶はないが、花國大總統なればこそかうやつてお客にして貰へるんですからね、冥加な話ですよ」

私は獨りで有難がつてゐたはいゝがさつぱり其の大總統が客間へ顔を出さない。

「歐陽さん、大總統はどうしたんですかね」

「いまに來るでせう、先刻一寸旅館へ來たが先に歸つてしまつたのであなたに見せることが出來なかつた」

私はとにかく一度大總統に拜謁を遂げないことには氣が落ち付かない。で仲居に「雪麗玉は何處にゐる」と云ふと「向うの部屋にゐるでせう」と奥へ續いてゐる部屋の方を見て答へた。そこで私は非常なる勇氣と無禮を冒して單獨で其の室へ闖入して見ると、それは小ぢんまりした飾のない部屋で、むかうに寢臺が据えてある。其處に雪麗玉がションボリ佇んでゐる。齡は十八九だがさう美人だとも思はれない。

彼女は私が言葉を掛けても返辭をしない。黙つてうつ向いてゐたがしまひにクルツとろしる向きになつてしまつた。其の様子は何事か悲しんでゐるやうにも見える。私は女性に對して常

に心弱い男だから、それが心配になつて來た。もとの部屋へ戻つて歐陽氏に其の事を話すると今度は歐陽さんが一緒にやつて來た。けれども彼女は矢張り私達に顔を見せない。まるい脊中だけを冷やかに向けてゐる。

「つまりね、此の女は憤つてゐるのですよ、普通ならお客の方で女に氣がなければ遊びに來ませんからね。處が私達の場合は違ふでせう。運河へ小舟を浮かべるのが私達の目的であつたのが物の間違ひでこんな羽目になつて、彼女に對して思し召しがあるわけでも何でも無い。彼女としては失望したのです。おまけに自分の名で申し込んだ船も破談にするといふ始末でせう、大總統とすれば面目がないでせう。で初めから此の女は、そんな事情なら家へ來て遊んで貰ふには及ばないと云つてゐたくらいですが、仲居達が商賣氣を出して承かないのです。此の人は憤つてゐるんです」と予情君は云つた。

「それぢやあ幾ら御機嫌を取つても駄目ですわね」

「まあ無駄でせう」

いゝ面の皮である。到頭私は大總統の脊中とお尻を見ただけで、諦めて客間の方へ戻つて來た。さうかうするうちお客が繰り込んで來た。みな龔さんの知人だが予情君の知り合ひの顔は

一人もない。六七人集つて私達主人側共で十人ばかり揃つた。早速食卓が開かれた。

何しろ客と主人とは一面識もない同志である。おまけに今夜の宴會なるものが何の目的であるのか來た客人達にも解せる道理がない。龔さんから無理矢理呼びに來られたので仕方なしにやつて來たといふやうなお客様である。流石の歐陽予情氏ほどの交際家でも今夜は少し弱つた體である。私に至つては更に一段と手持無沙汰だ。一體何の因縁あつて此の日本人がこんな處へたつた一枚飛び込んでゐるのだか譯がわからない。此の場合はせめて料理でも好ければ救はれるのであるが、生憎此の家でもどうせ一遍こつきり後の望みのない客である。一番安い料理を入れて一番高い勘定を取るのが此の場合最も賢明な策であるは知れ切つてゐる。故に食卓の上は單に恰好だけつけばよいのであつて味は問題ぢやない、思ひ切つて不味い料理だからお客様も呆れて箸をとらない。

宴會が始まつても大總統は全然顔を見せない。けれども餘所へ口を掛けた藝者達は續々とやつて來た。藝妓には必ず付き女と胡弓彈きの男が一緒に來る。そして思ひ思ひの客の背後へ席を占めて胡弓に合せて一曲歌ふ。歌ひ了ると自分の客に向つて「もつと歌ひませうか」と訊く。「御苦勞であつた」とお客が撈らふとそれで止めて次の妓が歌ふ。

爰で一つ妙な風習を見た。それは大總統の家の仲居が、外から来た妓に御祝儀を渡す。祝儀は二圓である。すると受け取つた藝妓は一圓を自分の方へ納め、一圓は元の持主へ戻す。客からは外來の藝者一人について二圓宛の祝儀を取るから一人について一圓此の妓館で利益を得るのである。面白いことは其の金錢の遣り取りを殊更公々然と衆人環視の間で行ふことで、出す方も返す方も圓卓の上から手を伸してお客の鼻先きで遣り取りをして見せる。これは此の土地の風ださうである。普通ならかういふ宴會の時、外から來る藝者は招待を受けた客人達の負擔であつて、猶前述の麻雀の寺錢も是れは無論客がめい／＼出すのだから主人側の負擔とばかりは限らない。けれども私達の場合は無理に頼んで來て貰ふ客だからそれらの全部をこつちが負擔しなければならぬのである。

藝妓の中にはなか／＼美人が居る。名前を聞くと曰く非々、曰く娟々、曰く鏡花——

蘇州でも南京と同じく藝者を禁止する議があるさうである。「遠からず禁止になるでせう」とお客の一人が云つた。若しそれが事實とすれば私は恵まれた機會に遇つたものである。

宴會は無事に終了した。お客達が皆歸つたあとで私達は支拂ひをして其の家を出た。まだ宵だのに凍るやうに寒い夜である。

## 三

私達は朝八時に起きて黄包車で城内へ行つた。城内は道路の幅が狭くてなか／＼繁華である。處々に思ひ掛けなく運河がある。河の兩側に高い建物が密集してゐるので深い谷底を水が流れてゐるやうな氣持がする。吳苑といふ茶館へ行つて龔さんを待ち合せてゐると間もなくやつて來た。

獅子林といふ有名な別莊を見物した。これは上海の貝氏といふ富豪の持ち物で建築も建物も完全に修理が出来てゐる。けれどもこれは二百年の歴史があるさうだ。建築の様式の複雑さは驚くべきものだ。回廊の窓の裝飾が頗る雅である。これは左官の仕事で、花牆といふのださうだ。石の築き方の巧妙さも此の園に至つて極まつてゐる。幾千とも數知れぬ奇岩奇石を一つの無駄なく美事に積み上げた手腕は大したものである。この園の石は庭師が積んだのでなく或る老學者が特に志願して積んだものだといふ。

拙政園といふ古い園も見に行つた。其處には明の忠臣文衡山手植の老藤があり、その側らに滿州八旗の會館がある。舞臺があり棧敷があり八旗全盛時代を忍ぶ建物だが廢朽の極に達して

僅かに家の形を存するばかりだ。更に奥の園に入つて行くと入口に門があつて番人が二人居る。断れば通して呉れる。番人は小説か何か読んでゐる。壁に掛つた時計は何時からか停つた儘になつてゐる。拙政園は建物も庭園も廢滅に瀕してゐる。中央に蓮池があり、周圍を建物や回廊が繞り様式の古雅精妙駭くべきものだが、奈何せんもはや救済の方法も何も無い。園内の樹木は紅葉して落葉錦繡を敷き小鳥が長閑に囀つてゐる。悽愴の氣が滿庭に滿ち鬼氣人に逼るものがある。

それにしても、留園と云ひ、獅子林と云ひ、この拙政園と云ひ、何といふ美事なものであらう。かういふ名建築が續々と生れた黄金時代を回顧して見ると現代の支那は餘りに淺間しい。私は徒らに過去の文化を懐かしむのではないが、舊支那文明の没落は外國の武力と經濟的壓迫が主なる原因であることを考へると悲惨に堪へられない氣がするのだ。支那の國民運動が成就して經濟的に優越な地歩を占める時が來たなら、支那の民族は必ず自國の文明を再建することに努力するだらう。さういふ時代の出現を私は翹望するのである。

## 西湖遊覽記

### 一

私とM君夫妻は午前八時五十分上海發杭州行の列車に乗つた。M君は脊廣、細君は和服、私は支那服だ。一行三人で和漢洋の組合せだといつてめい／＼眺め合つて笑つた。室は一等だが古くて汚ない汽車だ。そして其一等室には私達以外に殆ど客はなかつた。列車警戒の任務に就いてゐる支那の憲兵が十人ばかり其の室へ入り込んでゐる。其の憲兵共が、ガヤ／＼騒いだり床の上に物を食ひ散らしたり、劍付銃を擔いで車内を横行濶歩したりしてゐるのがひどく目障りであるが、眞逆外國の憲兵を叱り付ける權利はないから黙つて眺めてゐる。

車内は其の通りだが、沿道の風景はいつ見ても美しい。行けども／＼平坦な田園で山はない。處々に運河がある。此の前此の汽車に乗つた時は春であつた。蓮華草が一面に田園を彩つて楊柳は新緑の枝を繁らせてゐた。今度は秋だから風物に幾分か淋しさはあるが、江南獨特の柔かな景色だから凋落の秋といふ感じはしない。

M君は細君にきかれるたびに窓外の物などを教へて陸まじく語り合つてゐた。細君は支那へ来て數年になるが上海以外の土地へ旅行するのは今度が初めてだといつた。實を云ふと、私は神戸を立つて上海へ着くと、其處から一路南京へ走る豫定を立てゝゐたところが、M君は私の顔を見ると直ぐ「杭州へ行きませう、Y君もあなたの來るのを待つてゐるから」といつて杭州行きを勧めるのだつた。Y君といふのはM君の同窓の友人で此の夏杭州領事となつて赴任した人である。そのY君とは私も先年から懇意な仲だつた。段々きいて見ると、私が杭州へ行くことになれば、M君は無論同道するわけだが、M君の細君も一緒に行くやうな下話が出来てゐることを私は細君の口から聞いた。結婚してからまだ一年半か二年しか経つてゐない彼等夫婦が一緒に支那の田舎を旅行する機會は今迄にはなかつたし。その上M君は近々O新聞の上海支局長から大阪の本社の要職に榮轉することになつてゐたから、今度の機會を逸したら永久に其の機會は廻つて來ないかも知れないのだ。さう思ふと、私は自分の都合は捨てゝ彼等夫婦のお供をするのが自分の運命であると考へた。

M君は在支ほゞ二十年になる。彼は支那に對する澤山の智識をもつてゐる。彼の性格は新聞記者的であると同時に多分に詩人的である。さうして、明敏な頭腦と變化し易い感情とを併有

し、且つ彼は環境的に支那に飽き切つてゐる男である。刺戟を失ひ、感激が薄弱になり、支那の現實に對して極度に興味を失つてゐる。殊に彼は支那の政治及び政治家に對しては、其の職業的經驗から歸納して、今では殆ど少しの尊敬も信用も與へなくなつてゐる。けれどもこれは、彼が支那に對する智識を餘り多く有ち過ぎてゐるのに反して、支那以外の國々の政治や政治家に對する智識を比較的少なく有つてゐるためだと私は思つてゐる。彼がやがて日本へ歸つて來たならば、彼は必ず支那に對すると同じ様な愛想盡しを日本でも經驗させられることだらう。

松江、嘉善、嘉興——さういふ大きな驛だけ目に付く。松江は鱸を以て名高い江蘇省の一都市だが、嘉善はすでに浙江省の部になる。古い城壁の外を汽車は走る。丘の上に偉大な古塔が立つてゐたりする。城壁は處々煉瓦が崩れ灌木や雜草が生へてゐる。城外の町は必ず運河に沿ふてゐて、民船の帆柱が林立してゐる。

杭州に近くなると、低い山地を汽車は走り、此の邊へ來ると、黄櫨の木の紅葉が實に美事であつた。野山でも、村落でも目立つ樹木は皆黄櫨である。私は黄櫨の紅葉の美を今度の杭州旅行で初めて知ることが出來た。それは、光線の角度によつてあらゆる色の變化を見せ、五彩の

色の強烈なことは到底他の樹木の比ではなかつた。此の木から蠟を採取するのださうだ。

午後一時頃杭州へ着いた。殆ど破壊されてゐる城壁を右に見ながら暫く城外を走るとやがて停車場へ入つた。プラットホームに降りると直ぐに眼につくのは赤煉瓦の建物の柱といふ柱をペンキで塗り潰して書いてある文句だ。『打倒帝國主義』『肅正軍國餘孽』『懲辦貧官汚吏』『剷除土豪劣紳』『革命未不成功、國民仍須努力』等々。

私達は黄包車ワシボツに乗つて日本領事館へ向つた。市街を通り抜けると西湖の岸へ出る。其の邊には旅館が澤山ある。湖畔は公園式の遊園地になつてゐる。芝生の上や、ベンチの上に、赤いネクタイを結んだ青年と斷髮短袴の娘とが睦しく語らつてゐる、さういふのが幾組もゐる。湖の上は黄色く煙つて霞んでゐた。黄包車は湖畔の坦々たる道路を勢よく走る。沿道に古い建物が多いが、それらの塀といふ塀、壁といふ壁に例の宣傳文が書いてゐる。三民主義就是だの、國民黨綱領だのといふ題目を掲げて數千字を書いてある處もある。

日本領事館は、寶石山の麓にあつて、西湖に臨んだ小高い地に建てられてゐる。其の上に保叔塔が槍のやうに立つてゐる。私達は前觸れなしにやつて來たのだつたが、領事のY氏は喜んで私達を迎へてくれた。私はY夫人とは初対面だつた。

M君もY君も私も皆同年であるのは奇縁のやうな氣がする。M君とY君とは同じ學校の級友であるばかりでなく、其の當時から無二の親友で、學生時代には一緒に支那の奥地迄見學旅行をしたりして殆ど兄弟のやうな間柄だつた。

徳富蘇峰氏の『支那漫遊記』に、杭州領事館の客となつた記事がある。

予曾て記して曰く『風流第一の領事館を求めば、予が知り得る限りにては、我が杭州の領事館に過ぐるものなかる可し。予は固より官吏たるを希はざるも、若しざる場合ありとせば、一箇月にても、此地の領事となりたしと思ふ也。併し領事たらざるも、食客として寄寓せば、更らに佳也』と。今や十二年後に於て、其の理想は實現せられ、領事館の食客たり。人事意の如しとは、果して此事歟、予何等の善根ありて、此の福德を享受するを得たる乎。

二階のベランダに立つて見ると、西湖が一眸の下に見渡される。けれども今日はどうしたわけか天地の間が一面黄色に霞んで、太陽も光が鈍く、湖水の風景は模糊としてゐる。Y君とM君はそれが所謂黄塵の爲であることを説明してくれた。黄塵といふものは北方に限つたものかと思つてゐたが、南方でも折々其の襲來を受けることがあるのださうだ。

午飯の馳走を受けたあとで岳飛廟邊りまで行つて來やうといふことになつた。Y君夫婦、M君夫婦、それに私を加へて五人の一行で出掛けた。門前からダラ／＼と湖畔へ降りると船の出る場所があつて、既に小船の用意が出來てゐる。其處は一寸した入江で水岸に古い四五軒續きの二階建の長屋がある。古い上にもと／＼借家建の粗末な普請だが家の表側の屋根の下の處などには彫刻が箴めてあつたりするので一寸趣きがある。古さと不潔との中にも妙な氣品がある。私が其の事を云ふとY君は我が意を得たといふやうに

「これが詰り杭州の特徴ですね、かういふことは南方に限るのであつて、同じ支那でも北方では見られない事ですよ」

と云つて南宋文化の中心點であつた杭州人の趣味性が現代にもまだ傳統をひいてゐることをY君は私に話すのだつた。

領事館の眞下の處から、湖中の孤山といふ大きな島へ通じる一條の堤がある。これが有名な白沙隄である。其の起點にある石橋を斷橋といふ。隄上は平らな道路になつてゐて兩側に古い柳の木が立ち並んでゐる。隄の長さは三支里といふが、まづ十五六丁位あるだらう。私達をのせた小船は白隄に沿ふて進んだ。船頭は二人で、小さいかいで水をこぐ。かいを動かす度に

水底から紫色をして泥粉がモク／＼と湧き上る。水は薄濁つてゐるので底は見えないが浅いことはわかる。芥川龍之介君が西湖は泥田だと罵倒したのは是がためだつた。處がY君はこれについてかういふ説明を下した。

「これは皆線香の灰です。決して泥ではない。西湖のほとりには無數の寺がある。其の寺々で毎日たく線香の灰を湖中へ捨てる。數千年來捨て／＼した線香の灰が湖の底に堆積して此のやうに湖水を浅くしてしまつた。然し泥ではないから非常に清淨な物だ。古來の人間の信仰の遺物と云はふか、滓と云ふかそれは勝手だがとにかく素晴らしいもんだ」

「馬鹿なことを云ひたまへ、いかになんだつて線香の灰がそんなに溜るもんか、泥だよ」とM君が反駁する。

「いや灰だ、嘘だと思ふなら一掴み掴み出して見るがいゝ」

「泥なんか掴まなくなつていゝよ」

灰だ泥だの議論が暫く續くうちに船は孤山の一角に接近した。此處を『平湖秋月』といつて西湖十景の一になつてゐる。水岸近くに形のいゝ建物がある。其の前に何の木か知らないが繁つた葉をつけた非常な老樹がなる。建物の内外に卓が置いてあつて、茶を飲むことが出来る。

先年五月初夏に此處へ來た時私は其の木の下で茶を飲んだことを覚えてゐる。其の續きに國立藝術院といふ美術學校がある。船は孤山の表を通る。美事な建築が湖に影を映じて並んでゐる。浙江忠烈祠、中山公園などがある。古い茶館がある。「壺春樓」と書いた金箔の額が上つてゐる。何んとも云へぬ風致である。處が、其の邊の古い壁といふ壁は例の國民革命的宣傳文ですつかり塗り潰されてゐる。石橋の側面や、アーチの内面にまで書いてある。M君はそれを見てひどく憤慨して現代の支那を罵倒しはじめた。

「いや君の云ふやうなもんぢやないよ、風景は風景、宣傳は宣傳さ、あながちこれも悪くないぢやないか」とY君は辯護の役廻りに立つ。

「好かあない、お蔭で景色も何も滅茶々々ぢやないか」

「君の見方は少し主觀的過ぎる」

「いや俺は常識的だ、支那人が非常識だ」

M君とY君は又もや舟の中で議論を始めた。

Y氏は、生涯の事業として、支那美術史の著述を志してゐるが、彼は美術のみならず支那そのものを熱愛してゐる。善も悪も矛盾も錯誤も、支那の事實である限りそれに對して無限に寛

大な氣持をもつて接してゐる。

どちらも二十年支那に住んでみて、支那に對して愛想を盡し、腹を立てゝしまつたM君にも一理あれば、支那の事物に悉く共鳴してしまつたY君にも道理がある、がどつちも偽善的でない處が私はいゝと思ふ。

裏湖に入つて岳王廟の前で舟から上つた。水邊に近く古い牌樓が建つてゐて、其の眞正面に大きな樓門がある。門前の兩側に茶館や菜館があり、楊本など賣つてゐる店が何軒も並んでゐる。茶館には村の人達らしい汚ないお客が一杯入つてゐる。

岳王廟は樓門も殿堂も立派であるが建物は極く新しい。岳飛の墳墓は境内の横手の一廊の内にある。其の一隅に鐵の鎖で縛された秦檜の石像がある。忠臣岳飛を殺した罪に依つて千歳に悪名を遺してゐるのが秦檜である。

其の時私は俄かに小便を催して來た。すると二君口を揃へて「秦檜の處でやりたまへ」といふ。秦檜の像に小便を掛けるのが昔からの習慣ださうだ。けれども、南宋朝廷にも岳飛にも何の因縁もない私は秦檜がどれ程悪人だか知らぬが不淨を掛ける勇氣はない。墓所の中の林の中で放尿した。



門前へ出て榻本を買つて再び船に乗り移つて歸途についた。歸途の船中で「秦檜非か、岳飛是か」の問題が話題になつた。すると私に小便を掛けろと云つた二君も是非の断定には等しく躊躇するのだつた。

領事館へ戻つて、風呂に入り、Y氏の心をこめた晚餐の卓に就いた。西湖名産の蓴菜、筍の料理が出たのも珍らしかつた。驚く可きは筍で、十一月の初めだといふのに、罐詰ならぬ新筍が大皿へ山と盛られて出る。太さ小指位、長さ一寸位の筍をすでに掘り出して料理に使ふのださうである。かうなると二十四孝の雪中に筍を掘るなどは何等奇蹟でなくなつて来る。酒は本場の紹興酒で芳醇無類、性來下戸の私ですら思はず盃を重ねた。

## 二

昨日の黄塵は名残なく拭ひ去られて、透明な日光が湖の上に擴がつてゐる。私は二階のベランダの籐椅子に凭れて久しく其の景色をむさぼつた。白沙隄の土は淡紅色を帯びて、領事館の眞下から孤山へと續いてゐる。其處を女學生達が歩いてゐる。

領事館の玄關前の非常に高い石階の兩側や、其の前の庭には鉢造りの菊が數百鉢並べてある。今が盛の菊である。誰がかう上手に作つたのだらうと思つて聞いて見ると、支那人のボーイが栽培したのだと領事夫妻がいつた。其のボーイの細君だといふ若い婦人が玄關前へ出て來たのを見ると、ボーイの細君とは思はれない高尚な顔をした美人であつたのに私達は驚いたのだつた。

今日も揃つて見物に出掛ける筈だつたが、其處へ日本租界の警察署長が夫人同伴で訪問されたので、Y夫人は其のお客様の相手に残つて、あとの連中だけで出掛けることになつた。今日は靈隠寺へ行くことにして、一同黄包車に乗つた。

白沙隄を通つて孤山へ行き、Y氏は其處の國立藝術院といふ美術學校へ立ち寄つた。Y氏の用件は、來春上海か南京で開催される美術展覽會に日本の帝展の作品を参加せしめることについて本省へ相談すると、本省からそれは日支親善の上に甚だ良き事であるから隨意に相談を進めよといふ回訓が昨日手許へ届いたので、其の事を知らせるために此處の教授の某々氏等は會はふとしたのだつたが、重立つた某々氏が何れも展覽會の件で上海へ出張してゐるといふので其の日は其の儘立ち去つた。

昨日來た岳王廟の前を通り、湖畔を離れて山の方へ入つた。道路は先年に比べると非常によ

くなつてゐる。それと變つてゐることは乞食が居なくなつたことだ。先年は此の邊の道端には殆ど十間おき位に乞食が座つてゐて、物詣りや遊山の客に向つて極度に不快な印象を與へて錢を強請するのだつた、國民政府になつて以來乞食の居なくなつたことは特筆大書する値打があるが、さて其の乞食共が何處へ消え失せたか些か氣に懸る。

靈隱寺は門前に一寸家が並んでゐる。古い山門があつて、附近に菜館や土産物を賣る店などがある。此の寺は西湖第一の大寺で境内も頗る廣い。大きな岩窟があつて、其の内部には數多の佛體が彫刻されてゐる。其の側に唐代の石の塔があつたりする。念珠や木魚を賣る露店が澤山ある。私は國の母への土産に白壇の念珠を幾つも買ひ込んで首へ掛けた。何處かのボーイスカウトが遠足に来てゐる。本堂に詣り、五百羅漢堂を一巡する。此の寺の裏山を數丁登攀すると、韜光といふ奥の院があり、其處から見る風景は宛然一幅の樓閣山水圖で私の推稱おく能はざる地だが、今日は道伴れが多いので登らずに戻つた。

靈隱寺から山路を歩いて清澗寺へ行つた。此の數丁の道は何とも云へぬ幽邃さである。竹林と紅葉と二つ乍ら見ものであつた。清澗寺は泉水の鯉魚を以て名高い。長方形の泉水には清冽極まる水をたゞえ、其の三方を繞つて建てられてゐる平屋根の建築物が水中に倒映してゐる趣

きは他に類がない。

私達は更に徒歩で岳王廟前へ戻り、其處から小舟をやとつて一旦孤山へ着いた。壺春樓の前で舟を降り、其處の樓上で一瓶の老酒をのみ晝食代りに麵を食べた。それから又もや舟に移つて湖中へ乗り出した。私は先年の時西岸の劉莊といふ別墅を見物した印象を未だに忘れることが出来なかつた。其の事を話すと、では其處へ行つて見やうといふことになつた。それは蘇隄の裏になつてゐた。此の邊の湖の景色は何とも云へず静かである。岸の方には杉林などがあつて紅葉が點々と彩つてゐる。處々に湖水に面して別莊がある。

劉莊は其の中でも目立つて大きな構へである。けれども、先年來た時は可成り荒廢してゐたのが、今度はまるで見違えるやうに改修されて新しくなつてゐた。邸内の中央に立派な廟を祀り、其の前面には湖水の際に臨んで古い牌樓が建てられ、其美しい建築が水に映じてゐる風情はえも云はれなかつた。然るに今度來て見ると先づ嚴丈なコンクリートの塀で邸を圍つてある。新規に二階建の家が造られて窓には全部硝子張りの戸が箆めてある。それまでは我慢するとしても、例の牌樓の柱までコンクリートに變つてゐるには驚いてしまった。船頭にきいて見ると家の持主が變つたのではないさうだから多分代替りがあつたのだらうと思つた。門の處へ

舟を繋いで上つて邸内を見物したが到る處改造せられて先年の面影はなくなつてゐる。邸内の池から湖へそゞく小流があつて、竹林をめぐつて流れ、苔むした石の橋があり、形のいゝ柳が枝垂れてゐたのが忘れられなかつた。處が、竹林は掘り返されて西洋式の花園と變り、流れはコンクリートの樋になつて定木を當て、規則的に設計され、古い石橋も新しいコンクリートに變化してゐる。私はウンザリしてしまつた。かういふことは支那ばかりではなく日本でも何處にもあることだが、然し困つたことだ。西湖の名建築の一つが臺なしになつてしまつた。

此處では私が獨りで憤慨してゐるのにM君は委細構はず到る處で細君にカメラを向けてパチ／＼やつて悦に入つてゐる。

其處から私達は三潭印月に向つた。湖の中に石の輪塔が三箇、三角形の位置に頭だけ水上に出してゐる。ユラ／＼と水面に浮いてゐるやうに見える。其の近くに湖水の表面と殆ど同じ高さの島がある。島中には建物があり橋がある。千鳥にかけられた石の橋だけでも美事なものである。島を通り抜けて、又舟に乗つて歸途についた。

西湖の景色はどれだけ見ても見飽くといふことはない。それは自然と人工との調和の極致を現はしてゐる。西湖の美の半分は自然であり、半分は建築である。其處には數千年の歴史の装

飾がある。一木一石にも古人の魂が宿つてゐる。

先年あつた雷峰塔が崩壊してしまつて、西湖の南方の偉觀をそいでゐるのが物足らぬ心地だつた。

夕食後私は獨りで領事館を出て、湖畔の道を北へ歩いて行つた。もう日が暮れかけてゐるので人通りも稀である。それでも時々自動車が後から私を追ひ抜いて行つたりする。此の先にある新々旅館へ行く客らしい。

道は湖の縁についてゐる。右側の方は山に近く、其の下には寺が幾つもある。木魚を鳴らす音が靜かな夕暮らしく聞えたりする。十丁ばかり行くと新々旅館の前へ出た。私は少し離れて其のホテルを眺めて過ぎ去つた日を回想した。石の門も、建物も、玄關前のベランダも、昔と同じ儘である。其處では西洋人の男女が電燈の下で食事をしてゐた。

六年前私は旅先で獲た女を伴つて此の土地へ来て、此のホテルで幾日か短かい歡樂に酔つたことがあつた。其の私達の泊つた三階の部屋も今覺えてゐる。やゝ離れた處の、湖に向つた往來の縁に木製のベンチが置いてある。私はそれへ腰を掛けて煙草をふかし乍ら休んだ此のベンチも昔の儘である。私は彼女と二人で此のベンチに腰を掛け暗い湖の中から聞える胡弓の音を

聴き、まばたく星を仰いで語り合つたのだつた。生涯に再び此處へ來ることがあらうとは其の時は思はなかつた。私と彼女との關係は、空を飛び交ふ星の只一瞬の交錯に等しい短かい夢である。今では其の在家さへも知らず、問ひ尋ねる興味も失せてゐる過去の戀人であつても、かうした思ひ出の中だけではいつでも美しく若々しく躍つてゐるのであつた。

すつかりと暮れ切つてから領事館の方へ歩いて戻つた。

其の晩市街に火事があつた。

三日目は日曜日であつた。湖水には無数の遊船が浮かんでゐた。それが水蟲の群れのやうにツイ〜と右往左往に動いてゐる。

今日は吳山に登る豫定だつた。いつもの場所から小船で乗り出した。約二哩の湖を横切つて靜波門に達した。それは水門で、其の奥深く堀割が入り込んでゐる。其の附近は特色のある景色だつた。堀割の上に高い木橋が架つてゐる。橋の袂には、農家らしい二階建の家がある。繁つた竹藪がある。青衣の女が橋の上を通る。家鴨が澤山泳いでゐる。

堀割の兩側には黄櫨の木や柳の老木が立ち並んでゐる。黄櫨は光線を受けて五色に染つてゐる。附近には桑園が多い。堀割を奥へ〜と進むと、部落へ着いた。岸で村の女達が砧を打つ

たり、洗濯をしたりしてゐる。其處で堀割は止つてゐた。私達は西蓮古社と書いてある小さな祠の前で船を捨て、上つた。それから村を横切つた。廣い道路が開通してゐる。城壁が打ち壊されてゐる。土塀の間の狭い路を通る。路は次第に坂になる。此處はすでに吳山の麓である。

頂上へ登るのはさまで骨は折れなかつた。頂上には一面に奇巖怪石が重疊し、山には枯草が敷かれて樹木は全くない。此處は所謂吳山第一峰である。やゝ下の中腹に城隍廟の屋根や外壁が見える。

此處から見下すと、前に杭州の市街が展開し、左に西湖の全景を俯瞰し、右に洋々たる錢塘江を望むことが出來た。江を隔て、遙かに會稽山が雲煙模糊たる中に眺められた。私達の立つてゐる山に直ぐに續く山が鳳凰山である。南宋の宮殿は其の山上にあつたのだといふ。Y氏は其處も踏査して宮殿の趾を調べて來たといつて話した。金の皇帝が、南宋に使用して歸つた畫師に命じて西湖の全景を描かせたが、聞きしに勝る絶景であるので忽ち筆をとつて立馬吳山第一峰の句を書いて征南の師を起したといふ傳説がある。

山を降つて城隍廟へ行くと、丁度此の日は縁日で廟内は參詣の群衆で充滿してゐた。首や手に念珠を掛けた年寄や女子供ばかりだ。堂内には咽せ返るばかり線香の煙が立ち昇つてゐる。

堂は奥へ二つ三つ續いてゐる。

國民政府は迷信打破のために此の類の祀りを禁じる布告を出したさうだが、何のきゝめもない。宗教といふものは、局外者から觀れば皆迷信である。其の意味では、基督教でも、道教でも、佛教でも大差はない。國民政府の新思想家達が、道教や佛教だけを迷信だと思つたら間違ひである。道教を禁じるならば耶蘇教も同時に禁止すべきである。

一番奥のお堂ではお爺さん連中が御詠歌のやうなものを上げてゐる。其の周りを大勢の人が取り圍んで見物してゐる。斷髪の美しい娘などが混つてゐる。

廟を出て少し行くと見晴しの好い處に茶館がある。一同それへ入つて休憩した。すると城隍廟の中で逢つた女連れの一行がやつて来て私達と少し離れた席を取つた。其の中の一人は自立つて美しかつた。黒の縞子に花の刺繡をした服を着てゐる。支那の昔の小説には必ず城隍廟の縁日で若い男と若い女とが出逢ふ話や、美人が權門の子弟に見染められて迫害を受ける話などが出て来る。此の娘などもさしづめさうした小説の女主人公たるに適はしいが、生憎此處には彼女の相手となるべき若者がゐない。

坂道を降り盡すと市街へ出た。其の邊は古風な處だつた。名産の傘を賣る店が何軒もあつ

た。私達は繪日傘などを土産に買つた。本通へ出ると、其の通は市區改正をして非常に廣い道路が出来、立派な新式の店舗が並んでゐる。浙江省は支那の財閥の根據地である。浙江の首府である。杭州の町は一見して其の土地の經濟力の發展を物語つてゐる。浙江國貨陳列館といふ大きな建築なども殆ど完成に近付いてゐた。

私達は骨董屋だの寫眞屋などを素見しながら領事館迄歩いて歸つた。

## 上海の黒車

二二八

私と、友人の胡君は、北四川路のダンス・ホールを軒別廻つて歩きました。といつても、實際は、此通には十二三軒もダンス・ホールがあるんですから、それを全部廻り切れるものではありません。正確に云ふと、其の内の四軒だけ歩いたに過ぎないのでした。最初日本人の桃山ホールへ行き、次は支那人の名花俱樂部へ行き、其處を出て又日本人のブリュー・バアドへ行き、四度目に支那人の星樓跳舞場スタアハウスダンスホールといふのへやつて來たのでした。

スタア・ハウスへ來た時分には、さすがに私もへト／＼でした。上海シャンハイのダンス・ホールは、矢張り日本のゝやうに、あゝいふ具合にダンサーが澤山ゐて、テイケツトで踊るのに變りはないので、併し日本のダンス・ホールみたいに、あゝノベツ幕なしにガチャ／＼やつてゐるではありません。オーケストラの休みがある。レコードなどでは踊る人はありません。其の代りバンドのタイムがたつぷりある。其の上アンコールをしたりしますから、時々出て踊れば

いゝ。ダンサーをテーブルへ呼ぶ事も出來ますから、あながち踊つてしまつたからといつて右と左へ水臭く別れなくてもいゝんです。どうも、日本のダンス・ホールのあれだけは實に不愉快ですな。とにかく、四軒も踊つて歩く間には、自然アルコールだつて相當しみ込んでゐますから、體が疲れた上に頭も大分ボーツとして來ます。處が妙なもので、遊蕩兒の病癖とでも云ひますか、さうなるほど益々刺戟を要求してくる。ホテルへ歸つて寢やうなどといふ了簡は微塵起さない。もつと／＼あくだい強烈な歡樂を要求する氣持に驅られて來ます。尤も上海シャンハイといふ土地では、遊ぶからには必ず夜明して遊ぶのが習慣になつてゐます。ダンス・ホールは無論のこと、藝者屋へ行かうが、料理屋へ行かうが、夜通し底ぬけに遊んでしら／＼と朝の光が差し込んで來てから、そろ／＼歸り仕度をするなり、其處へ寢込むなりするのが、此の土地の遊びの約束です。およそ世界中で、時間の無制限なこと上海シャンハイに及ぶ土地は無いでせう。料理店でも旅館でも皆夜通しの營業で、現に此の北四川路などはどんな眞夜中でも、曉方でも、人がゾロ／＼歩いてゐます。自動車走、黄包車ワシボツが飛ぶ、料理店の中からは、客の騒ぐ聲や、料理を帳場へ通す茶房チャイの甲高い叫び聲が夜通し往來へ聞えてゐるのです。

不夜城上海シャンハイ——古い言葉だが、さういつた土地柄です。

星樓のダンス・ホールは三階で、さう廣くはないが構造が可成り凝つてゐて、殊に客席は落ちついて居心よく出来てゐます。ダンサーは支那人計りで凡そ三、四十人も居りませうか。さう大きなホールではありません。柱や壁は例の支那式のゴテ／＼した裝飾ですが、天井には、照明式の無数の星が光つてゐて、それが音楽の變る毎に、青くなつたり、赤くなつたり、黄色くなつたりして美しく瞬きます。「成る程、これがスター・ハウスなんだな」と、一寸微笑みたくなるやうな趣向です。

## 二

「どうです、黄さん少し踊りませんか」

忙しいフォックス・トロットを三遍も續けて踊つた胡君はテーブルへ戻つて来てさう云ひました。

黄といふのは私の支那名です。支那の友人はみんな私のことを黄——と呼ぶのです。

「僕あ少し疲れたよ」

「駄目ですなあ、まだ一時ちよつと過ぎたばかりですぜ、今からヘコ垂れるやうぢや話になら

なう」

「ヘコ垂れやしないがね、陣中多少閑日月さ」

「何ですそれあ？」

「支那の洒落だよ、君」

「冗談でせう、そんな文句はありませんよ。ハハハハ」

「然し胡さん、ダンスもいゝが、どうも此の職業ダンサーといふ奴は面白くないですな、義務的で、テイケット一枚で彼女の勞働を強要するやうな氣持がして不愉快ですよ」

「そろ／＼クダを巻き始めたね。散々強要して廻つた後で、今更不愉快もないもんだ。ねえ黄さん、あの女を御覽なさい。そら、蛇のウロコみたいな光つた服を着た女があるでせう。あれは李春といつて、有名な共産黨の首領李少白の妹ですよ」

「へえ——」

「あの女を呼んで見ませんか」

「面白いね」

「あなた、今度彼女と踊つてやつて伴れておいでなさいよ」

「心得た」

私は急に元氣付いて、オーケストラが始まるのを待つて威勢よく出て行つた。そして李春といふ女の前へ立つて、

「どうぞ」

と云ふと、李春はニツコリ笑つて立つて来ました。鼻に圓味のある、口許の感じのいゝ利口さうな顔立ちの娘です。

ブルースでしたから、話し掛けるにはまことに都合がいゝ。私は上海語で、

「君は李春といふ名前ださうだね」

「えゝ、李春です」

「今度僕のテーブルへ来ませんか」

「有難う、胡先生と御一緒ですわ」

「さうだ。君、胡さんを知つてゐるんだね」

「胡先生を知らない人はありませんわ」

「さう？ とにかく、入らつしやい」

「伺ひます」

踊つてしまつてから彼女は一度自分の席へハンド・バックを取りに行つて、直ぐ私達のテーブルへやつて来ました。

李少白と云へば、中國共産黨の巨魁で、共産黨の行動は一から十まで彼の指導の下に行はれ、一時李少白コースは中國共産黨全體の行路だと見られたくらゐでしたが、何處の國にもあるやうな内部的鬭争に敗北して、彼は遂に失脚し現在はモスクワへ遁れてゐる筈です。其の妹だといふ李春は、一見したところ頗る溫和しい娘でした。悪ずれて墮落してしまつた女とは見えませんでした。正しい家庭に生れて相當な教育を受けた者でなければ有つてゐない上品さがありました。

私は彼女の兄のことを聞いて見たいやうな氣持がしたがそれは止めました。さういふ質問は恐らく彼女を迷惑させると思つたからでした。彼女は酒は飲まないといつてオレンヂ・エードを管で吸つてゐました。

「ダンサーをしてゐて面白いですか？」

「いゝえ、ちつとも」



「ぢや何のためにしてゐるんです？」

「上海はわたし達に他の仕事を與へて呉れませんもの」

李春は即座にさう答へたが、彼女の眼には少しも反逆的な色は浮かばなかつた。私は彼女に對して可成り好感を持たせられました。

私達は雑談に時を移しました。

「君達は」と私は胡君と李春と二人に向つて云ひました。

「北京の黒車ヘイチュウの話を知つてますか？」

「知りませんね、黒車ヘイチュウといふのは何ですか？」

「それではお話しませう。北京には可成り古い時代から黒車ヘイチュウといふものがあるんです。それは北京人の漁色趣味がいかに古風で、そして獵奇的であるかといふ話です。場所はまあ大がい觀音寺胡同あたりの、定連ばかり行く、氣の利いた料理屋なぞです。其處で一人の定連が獨酌でチビリ／＼やつてゐる處から始まる。馴染のボーイに向つて『どうだ、一つ黒車ヘイチュウを世話して呉れないか』と云ふと、ボーイは始めは笑つてゐるが、結局承諾する、無論本人の信用の有無が重大な條件ですがね、日を約束して歸つて、其の約束の日に以前の料理屋へ出掛けて行くと、

ボーイが『萬事うまく行つてゐます』といふことを眼顔で知らせる。宵の内は例に依つて獨酌でチビリ／＼やつて待つてゐると、やがてボーイが『黒車ヘイチュウが参りました』と知らせて来る。ボーイに案内されて横丁へ行つて見ると、一臺の黒い馬車が待つてゐる。其の馬車へ乗るのだ。すると馭者は黒い布で窓も入口も外から塞いでしまふので少しも見えなくなる。そのうちに馬車は走り出す。始めの程はどの方向へ走つてゐるか見當が付くが、其の内に馬車は同じ道を往つたり來たりグル／＼廻つたりするのでしまひには方角も何も分らなくなつてしまふ。そして何處か分らない街を散々走つた揚句に馬車が留るのだ。馬車の戸を明けるから出て見ると、其處は何處だか判らないが淋しい横丁の長々と續いた塀の下の小さい門の前といふやうな場所です。馭者が合圖をすると小門は内から開かれ、中へ入ると直ぐ門は閉められて馬車は轆轤として何處かへ歸つて行く。すると小さな女の子が燈火を持つて出て來て案内してくれる。大きな邸宅の中を幾曲りとなく曲つた後、とある部屋へ連れ込まれる。部屋の中には燈火がカン／＼輝いてゐるし、ぼか／＼と暖かくて何とも云へない好い香りがする。室内は善美を盡してゐて家具調度は何れも眼の醒めるばかりだ。卓上にはすでに御馳走が用意されてゐて、無論酒の支度も整つてゐる。小女のすゝめるがまゝに盃をとり上げて小酌を試みてゐると、やがて素晴ら

しい美人が馥郁たる芳香を漂はせながら入つて来る——といふ順序なんだ。それから後は御想像に委せるとして、翌朝になると、歸る時には又前夜の小女が案内して呉れる。やはり小門の前に黒車ヘイチョが待つてゐて、それに乗せられ昨夜と同じ様にグル／＼引つ張り廻されて、最後に馬車の留つた處は、前夜の料理屋の横丁といふことになるんです」

「まあ面白いお話ですわ」と、李春が云つた。

「つまり、前清時代の高官などの云はゞ後宮だね、其の後宮の美人達が、つれづれなるまゝに、風流の才子を招いたのだ。其の風習が残つてゐたもんだから、民國時代になつても相當黒車ヘイチョは流行したもんだ」

「黄先生、あなたも其の黒車ヘイチョへ乗つたんですか？」と胡君は質問しました。

「いや、僕は経験したわけぢやない。北京ペキンに永く居た人から聞いた話なんですよ」

「さうですか、受け賣りの話ぢや詰りませんね。どうです黄さん、あなた黒車ヘイチョに乗つて見たいですか？」

「何處で？」

「上海シャンハイで、すよ」

「上海シャンハイにも黒車ヘイチョがあるんですか？」

「よその土地に有つて、上海シャンハイに無いものはありません。昔あつたもので、上海シャンハイに現在無いものはありません。上海シャンハイには世界中のあらゆる物があるのです」

胡君は誇らしげにさう云ひました。爰で一寸斷つて置きますが、胡君は上海の××大學の教授で、同時に個人で病院を經營してゐます。彼は浙江省の生れですが、十二三歳の時から日本へ留學して帝大を卒業して故國へ歸つた新進の醫學士です。金も地位もある上におまけに才氣煥發たる青年紳士であります。

「あなたがさういふアドヴェンチュアに興味を持つて居るなら、僕が一つ黒車ヘイチョをお世話しますよ、上海シャンハイの黒車ヘイチョは今のあなたのお話みたいなクラシックなものではないが、より以上濃厚で且つ華やかなものですよ」

彼の話は素晴らしく私を惹き付けた。胡君は人を擔いだり嘘を云つたりするやうな男ではな

い。

「それは是非世話をして貰ひたいですな」

「宜しい、承知しました？」

「いつ世話をして呉れます」

胡君は一寸時計を見て、

「今夜がいゝでせう？」

「エ、今夜——？」

流石に私も驚きました。

「少し時間が遅いが、まあ大概いゝでせう、ぢやあ直ぐ爰を出ませう」

胡君の話は足許から鳥が立つやう。

「黄<sup>ウオン</sup>先生、又あすの晩入らしつて黒車<sup>ヘイチョ</sup>の乗り心地を話して下さいな」

李春はにつこり笑つて椅子から起ち上つた。私達は直ぐボーイを呼んで支拂ひをして星樓の階段を降りて往來へ出ました。

## 三

深夜の北四川路はゾロ／＼人が歩いておりました。空には星が一ぱいこぼれてゐます。暑くも寒くもない四月末の氣候です。私達が通りすがりのタクシーを留めて乗りました。

「フランス租界——」

と胡君は云ひました。車は北四川路を何處迄も一直線に南へ走りました。南京路<sup>ナンキン</sup>を横切り漢口路<sup>カウ</sup>を横切り、福州路を横切りして、最後に共同租界とフランス租界との境になつてゐる廣い道路へ出ました。すると自動車は其の道路を右へとつて更に暫くの間走りました。其の愛多亞路の大世界附近を通るとまだ宵のやうに店舗を開き、人が黒くなつて歩いてゐました。それから又暫らく走つた時分に、胡君は「左」と命じました。多分白爾部路邊かと思ふが夜目では確と分りません。聽て霞飛路を横切り、又其の邊の横丁へ入つた時分には最早私には何處だかさつぱり分らなくなつてしまひましたが、とにかくフランス公園からさう遠く離れてゐない附近のとある閑静な住宅街の一軒の家の前で自動車を留めました。其前には五六臺の自動車が居ました。煉瓦の塀があつて、門の鐵扉は開放されてゐます。其處にはピストルを腰に着けた安南人の巡捕が立つてゐます。胡君は構はずズン／＼入つて行くから私も彼に隨いて入ると、胡君は左關の呼鈴を押しました。戸が明いて支那人のボーイが顔を出すと胡君は何やら符牒みたいなことを云ひました。ボーイは胡君を知つてゐるらしく愛想よく迎へました。私達は帽子とスプリング・コート<sup>スプリング・コート</sup>を脱いでボーイに渡すと、胡君は勝手を知つてるのでズン／＼二階へ上つて

行きます。「は、あ、さては二階にあるのか」と思ひ乍ら上つて行くと、二階は電燈が惶々としてゐて澤山の部屋があるらしいが餘り人聲がしない。今度は反對に別の階段を降り始めるではありませんか。今上つた時よりも遙かに澤山降りると、急に其處から音楽が聞え始めました。廊下は晝のやうに明るくて、處々に鉢植えの木だの籐椅子などが置いてある。硝子の扉を押して入ると其の中は薄暗くて可成り広い部屋があつて、其處で多數の男女がダンスをしてゐるのでした。

ステージでは靜かなタンゴの曲を合奏してゐました。私達は入口に近い一つのテーブルにつくと、直ぐにボーイが蒸しタオルを持つて來ました。曲が終るとパツと明るい電燈がつかました。

それで私は始めてホールの中の光景をよく見る事が出來ました。男女併せて二十人位の人数があるやうでした。大多數は中國人ですが、外人の男女も四五人は混つてゐました。ホールは、普通の營業ダンス・ホールなどのやうな、ケバ／＼しい裝飾はしてない代りに、カーテンでも、テーブルでも、椅子でも何から何まで贅澤づくめで、さうして休息するためには立派なソファアが方々に備へてある。來てゐる婦人達は、みんな上流の婦人ばかりであることは、其

の態度や服装を見たばかりで知ることが出來ました。何とも云へない落ちついた、人の氣持を自然に休養させるやうに出來てゐて、之れで何處となく淫蕩な歡樂の世界らしい自由さが部屋の空氣の中に流れ込んでゐるのです。

私はそれまで茫然として胡君の後について來てゐたのでしたが、始めて口を開いて聞いて見ました。

「君、此處は何處なんですか？」

「俱樂部ですよ」

「君も會員の一人なんですか？」

「まあさうです」

「これは例の祕密俱樂部なんですか？」

「否、別に祕密なことはありません、會員の紹介さへあれば誰でも來られる程度に開放的なんです、この二階や三階で吾れ／＼は、よくプライベートの會合さへ催すくらゐなんです」

「さうすると、只の社交俱樂部なんですか？」

「さうでもないですな、追ひ／＼あなたにも解つて來ますよ。偕て、そんな話より、あなたに

一人好いピアノをお世話したいですな、此處のオーケストラはたつた四人ですけれど、フランスから來た粒選りの樂師ですから、これで踊らんければ嘘ですよ。さあ、こちらへ入らっしゃい」

胡君は先に立つて私を向うの三四人のグループの方へ連れて行くのでした。

其のグループは、一人の男と、二人の女でした。皆中國人でした。

「胡先生、大變遅いぢやありませんか」

と其の男が云ひました。大きなロイド眼鏡を掛けた四十がらみの、でつぶりした立派な紳士でした。女達は無言の儘、馴れ／＼しいけれども禮儀のある眼付きで笑つて胡君を迎へました。

「今夜は珍客を案内して來たんです。この方が、豫々お話ししてある黄一香さんです」

私は少し固くなつて立つた儘一同にお辭儀をしました。

「さあ／＼、どうぞ」

ロイド眼鏡の紳士は態々立つて一つの椅子を私にすゝめました。

「謝、謝」

私は直ぐ腰を掛けました。

「今夜は何處から入らつしやいました？」

「胡先生に引き廻されて、北四川路のダンス・ホールを澤山歩きました」

すると一人の婦人が、

「胡さんは近頃ちつともこつちの方へお顔を見せないと思へば、北四川路へばかり行つてらつしやるんでせう？」

「いや決して……」

胡君は冷淡に云つて澄ましてゐる。二人の婦人はどちらも卅前位に見える齡頃です。無論相當な人の正夫人とか、第何夫人とかいふのでせうが、胡君は私を夫人達の方へは紹介したが私に對しては夫人達の名前は云はないのです。

二人の夫人のうち、一人はズバ抜けた美人でした。澁い地色の支那襦子へ精巧な刺繍をした豪華な服を着て、ヒスイの耳飾でも、ダイヤを嵌めた腕輪でも、一見して高價な物であることが分ります。襟足を短かく刈つた斷髪が其の顔によく似合ひます。切れ長の眼や、高い鼻が一種の威嚴を持たせて其の上無口らしいから一寸會つた感じは少し高慢らしく思はれるくらゐだ

が、人の話しを聴きながら時々流眇を送つてにつこりと笑ふ表情にはとても妖艶な感じがあるのです。

「胡君、この美人の奥さんはどういふ人なんですか？」

私は我慢し切れなくなつて日本語でこつそり胡君に囁きました。

「此の倶楽部ではさういふことは一切云はない規約があるので、あなたも爰で遊んでゐる間はそれを守らなければいけません」

胡君は一寸嚴肅な顔をして私をたしなめたあとで、

「そんなことより、葉夫人と踊つて見たらどうですか？」

「お願いしてもいゝのかね？」

「いゝですとも」

私は葉夫人といふ其の美人に向つて、

「一つお願いします」と云つた。

夫人はにつこりして椅子から起つた。私は夫人の背中へ手を廻して、緩りとしたステップを踏み出した。

「奥さんは葉夫人と仰しやるんですか？」

「ハイ、さうですの」

私はもう次の言葉が出ませんでした。すると今度は夫人の方から、

「日本でもダンスが盛んですか？」

「はい、近年ポツ／＼始まりました。だが、まだ極く初期ですから到底上海シャンハイのやうにはいきませ  
ん。私は下手ですから踊りにくいでせう」

「いゝえ、大變結構ですわ」

と夫人はお世辭を云ひました。それから三四回葉夫人と踊りました。と、踊り乍ら夫人が突  
然かう云つたので私は驚きました。

「銀座は相變らず賑やかでせうね？」

「奥さんは東京を御存じなんですか？」

「えゝ一寸、宅の主人が昔東京に居たことがあるものですか？」

「それは意外ですなあ」

私はテーブルへ戻つてから興奮した口調で胡君に向つて、

「ねえ胡君、葉夫人は東京を知ってるんだよ」  
すると胡君はそれには答へず、

「あなた、葉夫人に興味を持つたんですか？」  
と云ひました。

「興味？ 無論絶大の興味を感じてゐるが」

「それでは、黒車ヘイチョを支度させても構はんでせうな？」

私はすつかり黒車ヘイチョのことを忘れてゐました。いま胡君にそれを云ひ出されて急にまご付きま  
した。何やら不安な氣持のすることも事實です。

「いいですね」胡君は重ねて云ひました。

「萬事あなたにお任せします」

私はそう答へる外はありませんでした。

## 四

それから十分ばかり経つてから私と胡君はホールを出て元の廊下を通つて立關へ出ました。

門の外へ出ると一臺の立派な自動車が待つてゐました。

「さあお乗んなさい」

胡君はさう云つて、自分でドアのハンドルを把つて私を車の中へ押し込むやうにして乗せて  
しまひました。さうして彼はピシヤンと扉を閉めてしまひました。其の途端に車は動き出しま  
した。

車の中は全くの暗黒です。すると、忽ち私の鼻は非常ないゝ香料の香りを嗅ぎました。それ  
は先刻葉夫人と踊つた時に嗅いだ香りと同じものでした。

さうしてゐる間に、自動車は何處から何處を走つてゐたか分らなかつたし、其の間にどれだ  
けの時間が経過したかも私は覚えませんでした。やがて車は何處か邸内らしい所へ徐かに入つ  
て行つて留まると、外から扉が開かれました。車から出て見ると大きな建物の前へ立つてゐる  
のでした。

「どうぞ、こちらへ」

と暗がりの中から云ふから、眼を据えて見ると丈の高いボーイが立つてゐます。女は何處へ  
行つてしまつたか見えなくなつてゐます。私は黙つてボーイの後に隨いて行つた。立關で帽子

と外套をボーイに渡し、最初通されたのは壯麗な應接間でした。華やかなシャンデリヤの下に室内の贅澤な家具が照し出されてゐる。五爪の龍丸の刺繍したクッションは清朝時代の大官の服を仕立て直したものでせう！ マンテルピースの上に置かれた小さな大理石の裸體婦人の彫刻もよく見るといゝ加減な物ではなくなく凝つた物です。此處で暫らく待つてゐると、又別のボーイが現はれて、

「どうぞこちらへ」と云ひました。

導かれるまゝに階上へ上つて行くと、今度は瀟洒たる小部屋へ通されました。其の部屋にはいろんな繪畫だの骨董品だのが飾つてありました。壁には、模寫かも知れないがコロの風景畫があつたりさうかと思ふとこれは確かな倪雲林の山水の小品や、黃鶴山樵の梅の軸が掛つてゐたりする。隅の方の棚には郎窯の花瓶と皿が十枚ばかり、いはゆる牛血を盛つたやうな色澤で輝いてゐます。

「一體これはどういふ家だらう——？」

と私は非常な好奇心を唆られました。餘程趣味の豊かな富豪の家に違ひありません。上海では滅多にこんな落ちついた裝飾をした家を見たことはないのです。

ボーイが其處へ二三品の支那風の料理と共に洋酒の瓶をこれも二三本運んで來ました。間も無く人の來る氣配がするから振り返つて見ると、葉夫人が服を着替へて入つて來たのでした。サツパリした部屋着を着た碎けた夫人の姿は、最前ホールで見てゐた時よりもむしろ美しいくらいでした。

「わたしの大切なお客様をほつたらかしといひ濟みませんでした。さあ一つ召し上れ」

夫人は全く打ち解けた態度で云つて、私の側へ椅子を引き寄せて腰掛けて、酒の瓶をとつて注いでくれました。夫人自身の盃へもついで乾盃をしました。

「上海にはまだ當分御滞在ですの？」

「少しも豫定が付きません。仕事が少し眼鼻が付くまでは」

「それでは、其の間にはまだ時々お目に掛れますわね、あなたさへお厭でなければ」

「奥さん、僕は夢をみてるやうな氣がしますよ、あなたの御身分を打ち明けて下さることはできませんでせうか？」

「殿方といふものは、夢がお嫌ひですからね、何でも正體を突き留めなくては承知しないんですからね。さうして、正體が判つてしまへばもう御用はないんでせう」



「そんなことはありません、あなたの身分を知つたつてそれを他言する私ではありません」  
 「それはわたしだつてよく知つてゐますけれど、まあそんなお話は止めませうよ、どうせ今夜は正式の御面會ではなし、何にも餘計なことは考へないで愉快に時を過ごすほうが得ですわ」  
 私は持つて生れた探求癖が身内にムズ／＼するやうで堪らなかつたが、餘りしつこく追求して夫人を憤らせてしまつては虻蜂取らずだから其の邊で口を噤んでしまひました。

「あなた、急に黙つてお仕舞ひになつては厭ですわ」

「僕は感極まつてゐるのです」

「まあうまいことばかり、けれども御心配には及びませんわ。わたしあなたに毒酒なんか差し上げませんから、ホホホホ」

## 五

翌朝私は早く呼び起されました。私は淡紅色の帷を掛けた王様の寢床みたいな寢臺に寝てゐたのでした。

ボーイが「どうぞこちらへ」と云ふので、半分睡つた儘のやうな痺れた頭で後を随いて行くたのでした。  
 と、玄關の處でボーイは黙つて外套と帽子を着せて私を外へ押し出しました。外へ出て見ると早いと思つたけれども、實は太陽は可成り高く登つてゐて私の眼を鎗のやうに刺しました。其處に多分昨夜の車と思へる自動車が置いてあつて、ボーイが乗れと云ふので車内へ入ると同時にピーンと外から閉められてしまつたので又まつ暗になつてしまひました。  
 自動車は例に依つて方々走り廻つた揚句に漸く留つて降ろされた場所は私のホテルの前でした。

私は自分の部屋へ入つて、始めて顔を洗つたけれども夢が醒め切らないやうな朦朧とした氣持で腰を掛けてゐました。

其處へ胡君がニコ／＼笑ひ乍ら入つて來ました。

「やあ、黄先生、昨夜はお楽しみ」胡君は冷やかすやうに云つて「どうです、上海の黒車シャンハイヘイチュは？」

「胡さん、あの夫人はいつたい何者です？」

「あなたの想像では？」

「判らん、たゞ不思議でたまらない」

「ハハハハハ」

胡君は葉巻をふかしかけたのを止めて、愉快で堪らぬかのやうに思ふ存分笑ひました。

「では餘り罪だから種を明かしてやりますがね、あの女は二三年前死んだ有名な實業家だつた朱寶琦といふ人があるでせう、その妾なんです、もつとあなたが意外とすることはあの女はどうも日本人らしいんです、尤も神戸で生れて父親が支那人の混血兒で、子供の時から上海と神戸とを往つたり來たりして育つたと云ふですが、僕の見るところでは純粹の日本種かとも思はれるふしがあるのです。それはどつちだつて構はないが、朱寶琦が死ぬ時、あの邸宅と大きな財産とを貰つて今ではあゝしてゐるんですよ。先達てあなたのことを話したら是非逢つて見度いと云つたから、丁度昨夜黒車ヘイチョの話が出たのを幸ひ、葉夫人と相談の上で實は俄か仕立ての黒車ヘイチョを仕立て、萬事探偵小説好みで、あなたの獵奇心を満足させて上げた次第ですよ。上海シャンハイでは女と逢ふぐらゐに黒車ヘイチョなんぞ要りやしません、あなたが行けば何時でも彼女は歓迎しますよ」。

## 宋 美 齡

一

蔣介石は南京城内の軍官學校地下室に楯籠つてゐた。建物は日本の空軍から數回に亘つて爆撃されたが、未だ徹底的破壊とまでは至らなかつた。蔣は南京に居る以上は、軍官學校を離れなくなかつた。尤も其處には殆ど接續して彼自身の住宅もある。元來蔣介石は非常に自己の運命を信ずる氣持が強い。それは過去に於ける革命戦でも屢々危地に陥り、平時でも刺客に狙はれたり、毒殺されようとしたり、生命の危険に曝されたことは數限りなくあつたが、いつも運好く難を脱れ、結局今日の彼を築き上げたのである。政府部内にも過日來屢々遷都の議が起つてゐる。けれども實際問題となると、何處へ遷都するか？ 四川省の山奥へ逃げたとて矢張り日本の飛行機は襲つて來る。其の上四川は去年から凶作飢饉で、三、四百萬の窮民が號泣してゐる始末だ。陝西省の西安は、共產軍の朱徳や毛澤東に取つては、都合が宜からうが、蔣自身

は現に去年の暮に西安で張學良に捕へられ、九死一生の辛き目にあつた思ひ出の生々しい土地だ。又、其處だつて日本の飛行機は追つ翔けて来る。日本と戦つて、四百餘州に此處なら絶對安全だといふ土地はない。さうかといつて、日本軍の空爆が斯うも徹底的にやり出されては南京は潰滅だ。其の他にも南京を維持したい理由が幾つもある。

命の綱と頼むのは上海戦線である。上海の戦線は事實上南京の戦線だ。上海で勝てば、何とか局面の轉開しやうもある。そこで數日前上海の總司令陳誠を招いて、戦争の事實を質すと、陳は正直な人だから、嘉定すなはち第三線の防禦も困難である。第三線が破れる時は支那軍は大潰亂になると報告した。蒋介石はガツカリしてしまつた。

折も折、保定陥落の報が入つた。

蒋介石はいま／＼しさに堪へられなかつた。それは日本軍に對してあるかといふとさうではなかつた。眼の前に現れる對象は馮玉祥の髯面だ。

「馮の畜生メ、今度は彼奴のために一杯食つた」

ソ聯と密約したのは馮の獻策だ。日支開戦の曉は、ソ聯は外蒙から直に兵を進める約束だつた。それだから蒋介石も強氣になれたのだ。然るにソ聯は外蒙の庫倫に大兵を集中してはゐる

が、張家口を日本軍に占領されたので北支或は滿洲に進出する道がないと空嘯いて、今日迄軍隊は勿論飛行機一臺動かす模様がないのである。蔣は、自分がどうしてソ聯などを當てにしたかと今では後悔してゐる。ソ聯の目的は支那を赤化することであつて、蒋介石を助けることではない。これくらゐ分り易い道理の分らない蒋介石ではないが、それをうかと信じたのも馮玉祥の口車に乗つたからだ。此の永い間の政敵、一ト頃までは蔣か馮かとまで云はれて、砲火の間に見え、支那で一番油斷のならぬ相手であつた馮が近年はすつかり勢力を失墜し、蔣の風下に立つて唯々諾々頤使に甘んじるといふ態度は寧ろ惘然を極めたくらゐであつたので、それがために蒋介石もふと心を許したのが今回の間違ひのものであつた。此の上はせめて馮を戦線に追ひやらうと考へ、京漢線の總司令として戦線に立つことを説いたが、老獪な馮は自分が南京に居る方が共産軍との聯絡上有利であると主張して、南京を去ることを拒んでゐるのだ。

それと南京にもう一人蒋介石のイヤな人がゐる。孫文未亡人宋慶齡といふ老白狐だ。蒋介石の細君宋美齡の姉さんだ。此の婆さんが上海のフランス租界から南京へ乗り込んで來てゐる。そして城内で婦女國防決死隊の首領となつて活躍してゐる。宋慶齡婆さんは純粹の共産黨員だ。大體非常に不祥の女で、此の女が飛び出して來る時は必ずロクなことはない。今迄にも蔣

介石を手古摺らせたことは數限りない。本來なら死刑にでも處するか、國外追放を斷行すべき女だが、何分故孫總理の未亡人ではあるし、女房の姉さんではあるし、流石の蒋介石も餘り手酷いことは出来ない。大目に見てゐるのを好いことにして好き勝手を振舞つてゐる。第一年甲斐もなく素行からして良くない。陳友仁と一緒にロシアへ行つて醜名を流したくらゐはまだしも、平常若い異性を側へ近付けて寵愛する。それも一人や二人でなく相手は何人あるか分らない。其の方では則天武后以上の豪傑で、一夜に三人の男子を御したといふ風説さへもあるくらゐ。亂淫極まりなく、孫文の名譽を傷けること甚だしいが、只取柄は無智の民衆を煽動すること、殊に女學生を籠絡するなどはお手の物だ。

蒋介石も宋慶齡だけはほんとに蟲が好かない。馮玉祥と此の婆さんを獅子身中の蟲だと口に出して云つたこともある。が、女房の宋美齡は姉妹の情でそれ程悪くは思つてゐない。今度も南京へ來ると、宋美齡を煽り立て、國防婦女會の會長に祭り上げ、實權は慶齡婆さんが握つてゐるのだ。

## 二

宋美齡は軍事委員長官舎の地下室に住んでゐた。地下室はなか／＼完備したものでこれなら爆彈を落されても先づ大丈夫だ。相當手廣く、寢臺、テーブル、椅子、化粧戸棚等を始め必要の家具は大概運び込み、侍女が五六人寝る部屋もある。

宋美齡は今朝は大變機嫌が悪い。尤も數日前からヒステリーの氣味で、相手構はず八ツ當りをやる。原因は睡眠不足だ。睡眠不足の原因はと云ふと日本の空爆だ。全くあんな恐ろしいことはない。建物も大地も吹き飛んで了ふ。一個の爆彈が落ちる度に地球の姿が變るかと思ふばかりだ。あれ程恐るべき日本軍の空襲を、空襲を受ける直前迄誰もが豫想しなかつたのだから、寸前先是闇の世の中だ。然るにそれが現在では日常茶飯時のやうに頻繁に、日によると二度も三度も空襲されるんだから堪らない。どんな英傑だつて頭の上から重爆彈を落されて戦慄しない者はない。況んや女性である宋美齡がこれがために恐怖のドン底に投げ込まれ、安全な地下室に潜つてゐても夜もおち／＼眠られず、それが永いこと續くので頭が痛くなり、ヒステリーが昂じて來たといふことは決して耻辱ではなく、寧ろ同情すべき事柄である。然し彼女の今朝の不機嫌は直接日本の飛行機が原因ではなく他に理由があつた。

彼女は大變牛肉が好きだ。昔の支那人は牛肉は食はなかつたが、近頃の都會人は盛んに食

ふ。殊に宋美齡はアメリカに留學してゐたので以前から牛肉が好物で、毎日一回はビフテキを食はずにゐられない。そこで今朝も起きるとコーヒーを飲んだが、十時頃の朝飯にビフテキを食べようとする、暫く経つてからボーイが恐る／＼入つて来て、

「奥様、牛肉がございません」と云つた。

「なければ何處からでも取つたらいいぢやないの」

「方々問ひ合せましたが、何處でも品切れだと申します」

「そんな莫迦なことがあるものか、もつとよく方々聞いて見るが、馬鹿」

「ヘイ……」

ボーイは叱られて引つ込んだ。宋美齡は此の大都會にビフテキ一ト切れの材料がないなどといふ莫迦々々しいことを信するわけにかなかつた。處が又暫く経つと、以前のボーイとコック頭と二人ではいつて来て、南京中の心當りを残らず電話で問ひ合せたが、何處にも牛肉がないといふことを報告して來たのであつた。

とにかく牛肉は一ト切れもないのである。宋美齡は始めてかういふ事態を知つた。勿論戦争の影響なのだ。それも最初のうちとはとにかく、日本軍の連続的空襲のために、南京は大潰亂、

市民は大半逃げ去り、物資は杜絶し、穀物のやうな主要食物はともかく、牛肉などはもう久しく南京へ入つて來ないのだ。此の影響が今朝始めて宋美齡の食卓に現れたのだ。

彼女の不機嫌の原因はそれであつた。コックが、ハムなら上等がムいますがと云ふのを、  
「もう要らない」

と突劍呑に叱り付けて部屋から追ひ出した。イラ／＼して朝飯を食べる氣にならなかつた。そこで足音荒く地下室からコンクリートの階段を昇つて行つた。官舎の地上建物は、窓硝子は一枚も残つてゐず、壁も處々崩れ、まるで大地震にあつたやうだが、家屋其の物は不思議にも満足に建つてゐる。全くかうなると家の建つてゐるのが不思議と云ふより外はない。附近のいゝろんな建物は残らず吹き飛ばされたり、焼け失せたりして、地面にも殆ど隙き間なく直径數間の摺鉢のやうな生々しい大穴が明いてゐる。何しろ此處は日本軍の爆撃の目標になつてゐるのだから堪らない。軍官學校の校舎も半壊で、もう一發受ければ跡方もなく飛んで了ひさうな恰好である。満目の慘澹たる光景はあらゆる形容詞を超越してゐる。

けれども今朝は天氣だけは好かつた。江南の空は碧み渡つて、城壁の彼方には紫金山の岩膚に富んだ姿がスツキリと立つてゐる、太陽はキラ／＼笑つて「人間共のすることは俺は知らん」

と云つてゐる。

宋美齡は窓際に立つてポカンと外を眺めてゐた。

此の邊は明の時代に皇宮のあつた場所だ。最近まで其の礎石が残つてゐたが、南京政府は茲へ中山路といふ一直線の大道路を付け、其の附近に政府、參謀本部を始め各種の重要官衙を建設した。道路の西側に廣大な飛行場を造り、それと反対側に軍官學校がある。十年前には見渡す限りの原つばや畠であつて、鶉がしきりに飛んでゐたやうな場所が、僅々數年の間に南京の最も樞要な地區と一變したのだ。

窓の下でがや／＼饒舌る聲が聞える。

「王、××××××××××、給料を残らず貯めてゐるさうだから、もうよつぽど溜つたらうなあ」

「なに、それ程でもねえ」

「隠さなくてもいゝや、一體そんなに金を貯めてどうする氣なんだ。商人や百姓とちがつてこちらら兵隊は大砲の弾や爆彈の的になるのが仕事だ。一發食やアお陀佛だのに、金なんぞ持つてたつて仕方がねえぢやねえか」

「貴様のやうに死ぬことを考へたら何商賣だつて金は出來やしない。人間はさう矢鱈に死ぬものぢやねえ、あの馬一平の野郎を見ろ、彼奴なんぞは民國十五年北伐以來の兵隊だが、あの通り生きてゐる」

「ハハハ、貴様はたつた一人生き残つてゐる馬一平だけを勘定して、あとの全部死んでしまつた奴を勘定してゐないのだ。俺は反對に兵隊は皆死ぬものだと思つてるから錢は貯めないのだ」

「王の云ふことも陳の云ふことも、兩方共もつともだが、しかし割りに死なねえものだなあ。俺ア此の頃日本が空襲して來る度びに、塹壕の中へもぐり込んで桑原々々と云つてるが、今度塹壕から出て見たら他の奴等は皆死んでるだらうといふ氣がするんだ。處が出て見ると矢つ張り知つてる顔がムク／＼と其處ら中から出て來るには吃驚するぜ」

「つまり人間も土龍になれば生きてゐられるのだ」

「さうでない、土龍になつたつて食糧が無かつたら生きてゐられねえ。爆彈より恐ろしいのは食糧缺乏だぞ。俺ア昨日兵站部の或る人から聞いたが、南京にはあと半月以上は食ふ物がななさうだ、此の儘一ヶ月も籠城すれば城内は全部飢ゑ死だ」とよ」



云へばそれ迄だが。餘りにも恐ろしい無駄咄しだ。事實、無智ほど恐ろしいものはない。

南京の抗日女學生團は實際勇敢である。これは宋慶齡がアヂつてゐることは前に書いた通りである。彼女達は毎日高らかに抗日歌を合唱しながら街を練つて歩いた。市民はこれを歓迎し拍手喝采した。けれどもそれも始めの間だけで、日本の空襲が猛烈になり、市民は生きた心地なき今日では、お轉婆女學生共に喝采するどころではなくなつてゐる。それにも係はず女學生達は依然として元氣で、示威運動、戦線訪問、野戦病院の特志看護婦といふ風に八方活動してゐる。舊式の支那人はこれを見て、輓近中國女性の著しい變化に眼を睜り啞然として消魂してゐる。彼女達はやゝもすれば集つてたらふく酒を飲み、へゞれけに酔ひ、室内ならまだしも、足許も定まらず街路を行進するのである。

南京は食糧難を告げてゐるが、不思議に酒だけは豊富に有る。禁酒禁煙を主義とする蒋介石の新生活運動と甚だしく矛盾するやうだが、これは先般來『愛國養氣』と理窟を附け、浙江省紹興の酒を大量に強制徴發したのである。紹興は日本で云へば灘で、其處から産する紹興酒(黄酒)は支那第一だ。超非常時の軍事臨時税として多量の老酒を強制徴發して南京へ直送した。ほとんど公然の掠奪だが支那人はこんなことには慣れてゐる。元來蒋介石は浙江省奉化の出身

だから紹興は頗る縁故が深い。世に云ふ浙江財閥といふのは即ち浙江省の寧波と紹興の金滿家を總稱するもので、彼等の大多數は上海に店舗を持つてゐる。蒋介石と浙江財閥との關係は餘りに有名だから説明を要さないが、然らば蒋介石が郷里で評判が良いかと思ふと大違ひ、あの地方には『蔣來苦』といふ言葉さへある、蒋介石が郷里へやつて來る都度御用金仰せ付けがある。地方などではそれがために電燈一個に對してまで重い課税をするので、電燈を廢めて油にする細民などがある。支那の軍閥は郷黨に對して特に温情を示すなどいふことは微塵もなく、何處までも苛斂誅求を逞しうする。——これは餘談だがとにかくかういつた次第で酒だけは案外豊富にある。

抗日女學生團が最も勇敢振りを發揮するのは例の戦線慰問である。上海でも南京でも同じことだ。塹壕内に突進して、直接身を以て軍隊を慰問するといふのだが、中には酒を携へて行く者もあり、血氣な兵隊の殺伐な塹壕の中へ若い血氣の女が押し寄せるのだから風紀の紊れることは甚だしい。全く言語道斷だ。これを以て支那の女性の愛國熱などと思つたら大違ひだ。支那の一部女學生の低能非常識さを曝露する以外の何ものでもない。支那でも心ある人は顰蹙し憂へてゐるが、何抗分日で熱狂してゐる彼等に對しては何を云ふも理解が出來ず、且つ名目が



愛國運動だから、これに反対を唱へると直ぐ誤解され、やれ賣國奴だの漢奸だのと騒がれるので沈黙してゐるわけである。

處が、茲に奇怪なのは、女學生の示威運動がこれ程旺盛を極めてゐるのに反して、男子學生の抗日諸團體が最近すっかり鳴りをひそめて了つたことだ。これは男が直接運動をやると、直ぐ其の場から兵隊に徴發せられるからだ。現に戦線で働かされ逃げるには逃げられず弱つてゐる連中が相當ある。これを見ておち毛を慄ひ男共の方は今では意氣地なく小さくなつて潜伏してゐるとは實に滑稽千萬である。そこへいくと女は、差し當り兵隊に取られる心配がないから大威張で飛んだり跳ねたりしてゐるわけである。

## 三

蒋介石は地下室で、何應欽、宋子文等、腹心の者數名と重要會議を開いてゐた。何應欽はソ聯の頼むべからざることを極力主張した。其の言外には、馮玉祥と、共產軍代表として南京へ入つてゐる周恩來、その他親ソ系の人物を一網打盡に處分して、遅まき乍ら肅清を斷行すべきであるといふ意味が響いてゐた。何應欽は實際共產黨が蛇蝎の如く嫌ひである。支那を共產黨

の天下にする程ならいかなる他の帝國主義の前に屈服するも厭はないほど、共產黨を憎んでゐる。蒋介石とても勿論本心は何應欽とさう變りはない。それでなくては數年に互る共產軍討伐のあの國內戦争は意味がないことになる。ともかくも共產軍を打ち負かした。福建、江西に蟠居して一時は五十萬と號し、燎原の火の如く何處まで擴がるかと思へた共產軍を、湖南から四川に追ひ、四川から更に甘肅方面に追ひ拂ひ、絶滅とまではいかないが今では朱德、毛澤東の軍は約七萬位に減つてしまひ、嘗ての勢力はない。そこまでやツつけたことは確かに蒋介石、國民政府の大手柄だつた。彼の此の功績と實力とが全國統一に拍車をかけた。そこまでは宜かつたが、共產軍といふ強敵があるかなしかなると、今度は日本が當面の敵になつて來た。尤も日本の皇室中心の忠君愛國思想は、現代の三民主義の支那とは相容れぬ點もあるが、しかし勿論それは支那人とて理解出來ない思想ではない。共產主義とは到底諒解し合ふことは出來ないが、日本となら或る時期が來れば諒解し合ふことも不可能ではない。殊に最近の日本は、對支貿易の好調と在支事業の空前の好成績に鑑みて、支那が進んで排日を行はない限り日本としても無用の刺戟を避ける意志であることは明かだ。要するに支那から喧嘩を買つて出なければ日本はいつ迄も好き隣人でありたい氣持でゐる、蒋介石はよくそれを知つてゐる。けれども支

那を今日の程度まで統一に導いた原動力は、内では共産軍討伐、外に對しては排日抗日の思想である。排日は南京政府成立以來の傳統政策だ。それは單に目前の軍事や經濟の問題ばかりでなく、維新以來驚くべき強國を築き上げた日本と絶えざる對抗を續けることに依つて、眠つてゐる支那の國民を覺醒させ、新國家を建設せんとする實に遠大な蔣介石の理想であつた。要するに排日は目的ではなく、支那自身を強くするための手段である。そしてそれは豫想外に成功した。蔣自身も勿論得意であつたが、國民政府を擧げて有頂天になつた排日さへ獎勵してゐれば支那は強くなる——と、十人が十人結果を見てさう考へるやうになつたといふのは、天爲か人爲か知らぬが恐る可き錯誤であつた。自己を強大ならしむることは正義だが、その手段として他をば排斥することは罪惡だ。斯かる道德性を缺いた國家政策が、一時は榮えるやうに見えたとして、永い間の結果が良くないのは當然だと云はなくてはならない。果然今回の戦争にまで導き、國民政府の潰滅はもとよりだが、支那全土に及ぶ國民の物資的損害に至つては幾千億兆とも全く數字では計上が出來ない額に上つてゐる。此の責任は一に蔣介石にある。明敏透徹を以て鳴る蔣だが、南京の獨裁王と呼ばれ、支那の統一が完成したと自惚れたのが運の盡き、蘆溝橋事件が起きた後でも、先年の上海事變の時杭州から飛行機で主戰論が鼎のやうに沸騰し

てゐる南京へ着くや否や「日本と戦ふことは支那を亡國たらしめることだ」と直截明瞭に云ひ切つたあの調子で事を鎮める氣になれば戦争を回避することも不可能ではなかつた。澎湃たる抗日の狂瀾といつても、必ず負ける戦争ならやる氣遣ひはない。滿更負けるやうなこともあるまいと自惚れがあればこそ戦争を始めたのだ。

人間は一つ踏み違へると當分留め度もなく踏み違へるものだ。日本に對して戦端を開く、既に大過失である。しかし此の過失にはまだしも抗日といふ名分があるが、ソ聯との密約、續いてあの不可侵條約の公表、共産黨との提携に至つては既往の主義主張と正反對、矛盾不信以外に何等の名分が立たない。而も當てにしてゐたソ聯の援助がさつぱり煮え切らんと來ては、徒らに國內の共産黨や、馮玉祥の輩に乗ぜられた形で云はうやうなき失態である。だから今日何應欽が馮や周恩來等の處分を主張するのも尤もだが、しかし共産黨との提携は既に公表してしまつた事實だ。今俄かにそれを覆へず行動は餘りと云へば無定見を曝露して中外に信を喪ふばかりか、既に事實上軍隊は赤化して了つてゐる。再び打倒共産主義などと云つて見たところでも通用しないではないか。

さて、それはそれとして、當面の食糧問題に就いて彼等は評議した。上海戦線でも南京でも

一番困る問題は食糧だ。尤も即今直ぐ非常に困つてゐるといふわけではないが、今後半月一ト月と戦争が続く以上當然大窮乏に陥ることが分つてゐる。元來江蘇省は相當の穀産地だが上海と南京ナシケンを控えてゐるので省内の穀物は平生でも早く消費して了ふ。今年は數十萬の軍隊が入つて來たから格別である。今後は安徽、湖南、湖北などの穀物を輸入するより外はない。勿論これ迄も入れてゐるが、湖南、湖北の農民は毎年の如く襲つて來る洪水飢饉を恐れて政府の徴發に對して穀物を隠匿した。左様な農民は漢奸として死刑に處した。それでやゝ入つて來るやうになつたがこれ丈では到底不足だ。何しろ日本海軍の全支に互る海上封鎖は上海、南京ナシケンに取つては致命的打撃であつた。其の上日本軍が某々要地を占據する時機も近いと見られてゐる。即ち南京ナシケンに入る食糧道である。さうなると南京は全く食糧に窮することになる。

此の前宋子文が運動して、佛領印度支那及び南洋の米を數萬石輸入する方針を立てた。船はフランス船で、フランス國旗を掲げ、安全に南京及び上海シャンハイへ陸揚げをする計劃であつた。これには南洋の華僑が盡力したのである。ところが、いざとなるとフランスが、日本海軍から捕獲されて國際紛争を起すことを恐れて輸送を拒絶したので、此の計劃も空しくなつた。

こんな評議をしてゐる最中へ、宋美齡がツカ／＼と入つて來た。彼女ばかりは、どんな祕密

會議の席へも自由に出入することが出来るのだ。

「貴郎、貴郎」

「何んだい、美齡」

「貴郎は洪秀全を崇拜していらつしやるわね。孫總理も偉いが、洪秀全も一代の英傑だといつぞや仰しやつたわね。わたし、覚えてゐますよ」

と宋美齡は突ツ立つた儘で良人の顔を睨み付けるやうにして云つた。餘り唐突の質問だから蔣介石は面食つて、

「美齡、それがどうしたといふのだ」

「洪秀全なんか何が偉いものですか、彼は悪魔です。彼は××××××××××といふぢやありませんか。貴郎も矢つ張りさうでせう。男は皆悪魔です、飢ゑれば××××××××××食べるのです。ねエ貴郎、さうでせう」

「×××××——？」

蔣介石は眼をパチクリして妻の顔を見た。他の連中も驚いて眼を睜つてゐる。宋美齡の顔は蒼ざめ、眼が異様に光つてゐる。絶えず落ちつかない風で體を動かしてゐる。

(ハ、ア、少し逆上してゐるな)

と蒋介石は始めて気が付いた。氣丈な女だけれども近來餘りに心身を過勞させたのと、一つは例の空爆に對する恐怖からヒステリーになつてゐることは蒋介石も知つてはゐたが、これは餘りにひどい。靜かに睡眠を取らせるより外はないと思つた。

宋美齡は側に兄の宋子文や何應欽等がゐることさへ気が付かないかのやうにそつちの方は全く見向きもしないのである。

「ねエ、貴郎、貴郎」

と忙しさうに云ひ乍ら指で蒋介石の肩をつゝいた。其の手には大きなダイヤモンドが瞬き、精巧な純金の腕輪が優美な光を放つてゐる。蒋介石は又『女の焼肉』が出るかと冷や／＼してゐると、美齡はもう其のことは忘れて了つたやうであつた。

「貴郎、今朝わたしがピフテキを食べようとすると、何處にも牛肉がないんですつて。そんな筈ありませんわねエ、南京に牛肉ぐらゐ無いなんて」

「さうだとも、無い筈があるもんか。ヨシ／＼、私が歸つたら命<sup>いひつ</sup>けて取り寄せてやるから、お前は先に歸つてゐるがい」

蒋介石はなだめすかして早く此の場を去らせようと思つた。そして卓上の呼鈴を鳴らして一名の近侍兵を側へ呼び、

「直ぐに官舎へ行つて、奥様がこちらにいらつしやるからお迎ひに来るやうにと、女共に傳へて來い」と命じた。

「貴郎、戦争はどうなるお見込み？」

「戦争は中國の勝利だ」

「嘘です、嘘です。中國が負けてます。いまに日本の陸軍が南京<sup>ナンキン</sup>へ攻めて來ると、わたし達は擧殺しになるのです」

「莫迦を云へ、昨日から上海<sup>シヤンハイ</sup>で中央軍が大勝を博したのだ。日本人を殲滅する日も遠くはな

5」

「まあ、それ眞個ですの、何應欽さん？」

何應欽は突然話し掛けられたので、吃驚しながら、

「眞個です／＼、蔣委員長の仰しやる通りです」

「まあ嬉れしい、それでわたしやつと安心しましたわ」

高慢な日本を徹底的にヤツ付けてしまつてから、もう一度中正と二人で日本へ行つて見度いといふのが美齡の願望だつた。日本人は大嫌ひだが、日本の景色は好きだ。瀬戸内海の夕暮れ有馬温泉の情緒、それは夢の中に住んでゐるやうな景色であつた。其の有馬温泉へ美齡が母と共に滞在してゐる處へ、一時失脚して日本へ亡命した蒋介石もやつて来て、こゝで始めて二人の戀愛が成立したのであつた。有馬の温泉は蒋介石にとつても美齡にとつても終生忘るべからざる記念の土地だけれども、美齡は、有馬を思ひ出す度び神戸の牛が美味かつたことも併せて思ひ出すのであつた。

彼女は浙江財閥宋氏一門の愛娘として生れ、世の中の不足といふものは知らず、其の上アマリカで教育を受けたから、極めて進歩的で、且つ聰明無類の評判なる女性だ。かういふ女性に有りがちな我儘も人一倍である。けれども、元來賢婦人であり、貞女である。貞淑の點では姉妹といつても孫文未亡人とはまるで違ふ。彼女が内外共に蒋介石を助けて今日に至らしめた烈々たる婦徳は大いに賞讃に値するものである。

これ程の女だが、矢張り女だけに何處かに弱いところがあると見えて、今日の度外れのヒステリーの狂態を目撃して其處に居合せた人々は氣の毒でもあり、且つ何んとも云ひ難い暗い氣

持になつた。宋子文は實の姉だけに餘計心配であつた。

丁度よく其處へ侍女が三四人で迎ひに来たので、蒋介石は靜かに妻を侍女達に渡し、部屋の出口迄送つて行つて、

「いゝかい、家へ歸つたら牛乳でも飲んでもう一度よく寝るんだよ」

と子供をすかさずやうに背をさすり乍ら云ひ聞かせると、美齡も其の時分は大分昂奮をさまつた様子で黙つて合點き乍ら侍女に衛られて小暗い階段を昇つて行つた。

蒋介石は自分の席へ戻つて來ると、誰に云ふともなく呟いた。

「なアに、何んでもない——」

## 四

中山路の方から一臺の軍用自動車が走つて來て、軍官學校の構内に入り、半壊れの大玄關の石段の前で停ると、中から降りた二人の人物。二十五六貫の巨軀をダブ／＼の茶ツば服で包み、兵隊の穿くドタ靴を穿き、鬚むじやの顔の中から不氣味な眼を光らせてゐる一見怪物然たる漢は馮玉祥であつた。もう一人のはうは色の黒い瘦せぎすの男で、鼠色の支那服を着てゐ

る。これは共産軍代表周恩來といふ男であつた。

二人は石段をドン／＼昇つて行つた。石段の上に立つてゐた五六名の衛兵は伍長の號令の下に捧げ銃の敬禮をした。馮が先に立つて廊下を進み行き、地下室。入口の側近く迄行くと、其處にも着劍の衛兵が二名立つてゐた。兵は敬禮をした。しかし兵は、馮玉祥が、地下室の方へ通り過ぎようとするのを急ぎ前へ廻つて遮り留めた。

「閣下、何處へお通りになるのですか」

「地下室へ通るので。蔣委員長は居られるだらう」

「ハイ、元帥は地下室に居られます。然し只今重要會議中で、誰が來ても通すことは成らんといふ命令であります。」

「馬鹿ツ、軍事副委員長が急用で來たのだ、其處のけツ！」

「成りません」

二名の衛兵は直立不動の姿勢を取つた儘行手を立ち塞いでゐる。

「ぢや、急いで蔣委員長に取り次いで來い」

「取り次ぐこともならんとの命令であります」

「何ツ！」

馮玉祥は滿面朱をそゞぎ、いきなり拳を固めて衛兵の横面を殴つた。殴られた兵は、タジ／＼とよろめいたが、直ぐ様元の不動の姿勢に戻つた。

「取り次がんかツ」

「成りません」

衛兵は、いざとなれば軍事副委員長でも突き倒しさうな氣勢を示した。馮玉祥は腹が立つたが、兵隊は直屬上官の命令を絶対に奉ずるのが軍律だから如何ともすることが出来なかつた。そこで二三歩後戻りして周恩來と何か相談を始めてゐる時、突如、空襲來の警報が鳴り出した。

各所の警報は一齊にけた／＼ましい音を發し、高く、低く、氣が狂つたやうに鳴り續けた。忽ち地軸を搖がす爆彈投下の大音響！いつもは警報と襲來との間に多少の時間があるが今日は両者が殆ど同時で、警報が鳴り出した途端に早や爆彈投下が始まつた。

數十機の日本の飛行機は、南京城<sup>ナキン</sup>の上空を群がり飛んだ。大鵬の翼で陽を遮り乍ら舞ひ降るもの、舞ひ上るもの、横轉逆轉の亂舞、爆彈は到る處に隙き間なく落された。地殻まで裂ける

やうな大爆音の連続、數百メートルの高さに噴き上げる黒煙、土砂、建築物の破片、人間のバラ／＼の屍體、其の他ありとあらゆる地上の物の末路。紅蓮の焰は黒煙の下から、燃え上る、燃え擴がる。其の中を右往左往する人間。

城外の紫金山や、雨花臺の砲臺、城内の獅子山や清涼山等の諸砲臺、其の他城内の各所に備へ付けてある無数の高射砲や機關銃の叫び。砲身は熱のために赤く爛れ、弾は空中で罵り唸り、下界の人間は皆氣狂ひになる。

突如たる日本軍の空襲に、馮玉祥と周恩来は狼狽した。此處にゐては危険だから、安全な地下室へ駆け込まうと思つたが、衛兵は此の中でも毅然として、二人を通さなかつた。爆弾は頻繁に周圍へ落ちた。其の都度幾つかの生命が土砂と共に天へ昇つた。馮と周は耳も眼も明けてゐられないので、外庭に面せる石だたみの廊下に突ツ伏してゐた。

すると其の時地下室の方から出て来る人聲がしたので、馮は流石に體面を思ひ、體を起してそちらを見やると、宋美齡が侍女に取り圍まれて廊下を反對の方向へ走つて行き掛けるところであつた。馮はこれを見ると急いで後を追つ掛け、作り笑ひをして聲を掛けた。

「奥さん、奥さん、又うるさい日本蠅がやつて來ましたな、アハハハ」宋美齡は立ち停つた。

「これしきの空襲は、恐れることはないです、時に、蔣委員長はいらつしやるでせうな？」

宋美齡はブル／＼體を慄はし乍ら、馮玉祥の顔を見てゐたが、突如、裂帛の叫び聲を擧げた。

「あ、此の人は洪秀全だ、中國を亡ぼす悪魔だ、——××××××××××、女性の敵だ！」

さう云つたと思ふと、突然右の手を伸ばして馮玉祥の顔をピシヤツと叩いて、人々の駭く間に直ぐ向うへ驅けて行つてしまつた。

### 地下に棲む人々

#### 一

宋美齡はお氣に入りの侍女の梨香<sup>リイシャン</sup>が見えないので方々探させたが何處へ行つたか分らなかつた。けれども、梨香<sup>リイシャン</sup>のことは別段大した用事でもなかつたから其の儘にして侍女も伴れず蔣介石の地下室の方へ行つた。地下室の入口に立つてゐる禁衛兵は、彼女を見ると捧げ銃の敬禮をした。宋美齡はドン／＼地下室へ降りて行つて、蔣介石の居室へ入つて見ると、其處に居る筈の蔣の姿が見えなかつた。地下室は三部屋位に分れてゐた。そこで美齡は他の二室の方へも扉

を開けて入つて見たが何處にも蔣の姿は見えなかつた。コンクリートで造つた大きな箱みtainな部屋の中には電力不足で蠟燭位の光しか發しない電燈が死んだ魚の眼のやうに鈍く光つてゐた。

「確かに居る筈なのに何處へ行つたんだらう？」

美齡は再び階段を昇つて、入口の衛兵の居る處へやつて来て、

「大元帥は何處にいらつしやるか、お前達は知らないか」

衛兵の班長が直立不動の姿勢でもつて答へた。

「大元帥閣下は、地下室に居られます」

「いらつしやればお前達に訊きやしないわよ」

「……………」

衛兵は眼をパチクリやつた。

（それでは地下道から何處かへ出て行つたのだらう）と美齡は思つた。此の地下室には此の入口のほかに祕密の地下道が二條も三條も附いてゐることを美齡は知つてゐる、それにしても此の夜陰に地下道から何處へ出て行つたのだらう——と考へたが、それは彼女にも見當が付か

かつた。彼女はもう一度地下室へ降りて行つた。そして停電のために備へてある蠟燭の一本に火を點じ、それを持つて、案内を知つてゐる一つの地下道の入口を開けて中へ入つて行つた。地下道は平らに進んでゐた。そしてそれはほゞ人が立つて歩ける程度の高さに出来てゐる。どれ位進んだか坑の中だから正確なことは分らないが、少なくとも二百メートル位は歩いたと思ふ頃、宋美齡は氣が着くといつの間にか坑の外へ出てゐた。よくよく見廻すと其處は池の縁であつた。此の池は、明朝の宮殿があつた頃後宮に屬する庭園の一部にあつた池泉の趾で、ほんの形ばかり残つてゐたのを、其の邊を地ならしたり掘り下げたりすると築山に用ゐた美事な太湖石が無數に出て來たので、急に其の石を利用して庭園を築き、新たに池を穿ち、石の橋を架けたり、荷葉を植ゑたり、亭を建てたりしたのであつた。宋美齡が地上へ飛び出した場所は、太湖石を積み上げた築山の胸ツ腹に口を開いてゐる洞穴の入口だつたのである。

宋美齡は初めてこんな地下道を歩いて見たので餘程好奇心を満し、蠟燭の火を吹き消して、靜かに池の縁を歩いて見た。月はあるが薄曇りの夜であつた。星は一つも見えず、燈火管制の地上には螢ほどの火の光もない。南京人は最早久しく此の状態に慣れてゐると云へば慣れてゐるが、晝はとにかく、夜になつて地上に一個の燈火も見られなくなるといふことは實に人類生



活として堪へられない寂寞と苦痛を齎すのであつた。

ふと、人の聲が耳に入つた。しかもそれは直ぐ間近い處からだつた。それは亭の中に人がゐてヒソ／＼と語り合ふ聲であつた。美齡は呼吸を殺し、樹木の蔭から窺ふと、亭の中にゐるのは二人で、しかもそれは男と女だ。

「梨香——」

と云ふ聲がハッキリ聴えた。美齡は、はつとした。女が梨香であつたことも勿論だが、それよりもつと駭いたことは、男の音聲が蔣介石に似てゐたことだつた。しかしそれは自分の耳のせいだかも知れない。眞逆——と思ふ一方ムラ／＼と疑惑が湧いた。生憎と男の方は背だけしか見えないのであつた。しかし美齡は蔣が常々梨香に優しく當ることを思ひ出した。それは自分の氣に入りの侍女だから當然であると思つてゐたが、今にして思へば梨香を見る時の中正の眼はただ事ではなかつたやうだ……。

男と女はひしと抱擁した。美齡が自制力を失つてそれへ飛び出して行かうとした時、亭の中の男は女を突き放すやうにして飛鳥の如く其の場を走り去るのであつた。美齡の眼には支那服を着た長身の後姿だけが残つた。

「梨香——」美齡の裂帛の聲が響いた。

「あ、奥様——」

「梨香、お前今何をしてゐた！」

梨香の眼には泪が一杯溜つてゐた。それを見ると美齡は一層激怒して、いきなり梨香の頬をピシヤリと撲つた。

「相手は誰だかお云ひ——」

梨香は「わつ」と聲を擧げて泣き出し、地にひれ伏してしまつた。梨香はたゞ泣くばかりで一ト言の云ひ開きもしなかつた。美齡にはそれが單に女の圖太さのやうに見えたのでます／＼腹を立て、狂氣のやうに罵り乍ら梨香を引つ立て、自分の部室の方へ戻つて來た。

## 二

近來日本の飛行機の空襲がいくらか遠間になつた。それは南京には最早破壊すべき物も残つてゐないからであつた。それでも南京の市民や國民政府の官吏達は敵の飛行機の飛んで來かたの少ないことだけを喜んだ。市民は三分ノ一以下に減つてゐるが、現在残つてゐる者は、田舎

にも何處にも行先きのない人間だとか、家族だけ避難させて家財道具の番人に残つてゐる者とか、さういふ人達ばかりだつた。商人は勿論のことだが普通の住宅でも、全然空家にすればどれ程戸締りを嚴重にしたところで匪賊のため掠奪されて了ふ。匪賊のみならず一般市民もこんな時はお互ひに掠奪し合ふ習慣がある。留守番がゐてさへ往々掠奪される。そこで商人などは商品を地下室へ隠匿して『全家一空』などと書いた貼り紙を表へ貼つたりする。恐ろしいお客様を断るためだがどうかすると直ぐと例の漢奸呼ばはりをされるので、全く困つてしまつてゐる。

空襲のない晩でも彼等は地下室で寝る習慣がついてゐる。尤も中樞區域で爆撃を受けた處は地上で寝たくても建物が無いからでもあつた。爆撃を免がれてゐる商業區域だの片寄つた住宅地などは安全なわけだが、それでも萬一落されては堪らんから、それ／＼地下に穴を掘つて潜れてゐる。事實南京城<sup>ナシキ</sup>を擧げて軍事施設を施してない場所はないから、假りに城内のどの部分を爆撃されたとして抗議の申し立てやうはないのである。

就中、中山路に沿つた中樞區域の地下室と來ると見事な物だ。元來支那人はこの穴を掘ることが非常に上手である。穴掘りの天才である。塹壕などはお手の物である。だから急造の地下

室といつてもなか／＼驚く程巧妙に出來てゐて、われ／＼が簡単に想像するやうなものではない。寢臺も運んであれば立派な料理場もあるといふわけだ。又、地下道に依つて地下同志の交通も出来るやうになつてゐる。家によると電話もラヂオも引いてある。電燈は勿論のことである。只數回の日本軍の爆撃に遇つて發電所を破壊されたことは打撃だつた。南京<sup>ナシキ</sup>には三四ヶ所の發電所があるから全部破壊されたわけではないが、現在辛うじて爆破を免れてゐるのは一ヶ所だけで、それだけの電力で城内全體へ供給するのだから一概に不足で電燈は甚だ暗い。元來南京<sup>ナシキ</sup>の電燈は平時でも非常に暗く、且つ毎晩きまつて停電する。南京<sup>ナシキ</sup>四不と云つて南京<sup>ナシキ</sup>に不可い物が四つある。其の筆頭が電燈の暗いことと云はれる位平時でも暗いのである。ところが平時はカフエーなどでは×××、現在はそれどころではない。夜は絶對燈火管制だから中山路でも太平路でもどんな目貫きの街でも地上から一切の燈火を消して了ふ。が地下街は夜晝なしに燈火を要するからなか／＼電力問題は重大である。然るに英米總領事館(公使駐在)だけは特に上海<sup>シヤンハイ</sup>から電力を供給されてゐるので電燈の心配はない。そこで國民政府では英米公使館に頼んで重要な場所だけは其の電力を分けて貰つてゐる。これだけでも國民政府は米に感謝する筈だ。

かういふ状態だから、地下室に電燈が點いてゐるとは云ひ條甚だ以て暗いのである。まるで團炭の火のやうな赤い色をした電燈がボンヤリ點つてゐる。明滅といふ言葉を使ふなら滅に近いはふの世にも憐れな心細い電燈である。

さて話は元へ戻るが、ちやうど其の晚中山路と太平路とのT字路から程近い處にあたる一大地下室に澤山の女が集つてゐた。それは多く政府要人連の家族、細君に令嬢達であつた。全體では三十人からゐた。そんなに大勢何んで此處へ集つたのかと云ふと、平常はそれ／＼自分の家の地下室に潜つてゐる連中だが、穴住ひばかりしてゐてはお互に會ふ機會もなく、それに第一氣が減入つて婦人間の士氣？にも關するから一つ今夜は會合を催して大いに抗日の氣勢を擧げようではないかと、誰が發起したのか知らぬが晝間のうちに檄を飛ばし、而も其の文句中に「宋美齡女史も今夜の會合に出席する」とあつたので、多少氣のない連中までそれではといふので出席して來たわけであつた。

夕食後の會合だから、御馳走はぬきで、支那茶に西瓜の種、紅茶に洋菓子位のものであつたが、それでも女達は元氣で饒舌り合つた。話題は日本を罵詈譏することと、英米を禮讚することと、食糧難の話が主なる題目であつた。いづれも眞剣な問題だから眼の色を變へて饒舌つ

た。支那人は男女を問はず得手勝手な國民だが、殊に女とくると理屈は分らないから、こんな場合の談話は側で聞かれたものではない。おまけに上海の戦況も北支の戦況も政府では一切發表しない。否、發表しないではない、今以て「勝つた／＼」で大虚報ばかり、眞面目臭つて發表してゐるのだ。だから女などは上海全市が完全に日本軍に依つて占領されてしまつたことも、山西軍が殲滅されて太原まで落城したことも一切知らないのだ。勿論政府の要人がそれを知らない筈はないが、彼等と雖も我家へ歸つては妻子に向つて眞實は語らないのである。上海の支那軍は大潰亂、蘇州に向つて敗退した、日本軍は怒濤の如く押し寄せて來つゝある。此の分では南京も年内に陥落するであらう、などと云はふものなら女共は忽ち發狂してしまふ。

「宋美齡さんは入らつしやらないのかしら」

「どうしてお見えにならないのだらう」

もう來るべき人で顔を見せないのは宋美齡一人であつた。せつかくこれだけ集つても宋美齡の顔が見えなくては物足りなかつた。主催者は必ず美齡が來る約束であると云つて頻りに氣を揉んでゐると、餘程遅刻して美齡が地下室へ姿を現はした。

彼女の出現は凡ゆる場合に太陽であつた。地下室は俄かに光りを増し活氣づいて來た。女達

は戦争のことも、自分達の將來の運命がどうなるであらうかといふことも、支那の國家の運命がどうなるであらうかといふことも、何もかも忘れて楽しく噪ぎ出した。其の地下室は正しい長方形をした立派な客間ほどの廣さがあつた。けれどもそれはコンクリートで固めた箱ではなく、單に土を掘りツばなしにした部屋であつた。勿論崩壊を防ぐために多少の設備を施してあるが、至つて簡単なもので、側面などは楮土の地層の断面が其の儘天然の壁になつてゐた。

宋美齡は此處へ來てからも我家の地下室へ監禁を命じて來た梨香<sup>リイシャン</sup>のことが氣に掛つた。梨香はまだ何も白狀しなかつた。美齡はあれからまだ蔣にも會はないのである。しかし梨香<sup>リイシャン</sup>が白狀しないところを見ると矢張り相手は中正なのであらうと想像した。

(一國の元首たる者が夜庭園で女と密會するなどとは何事であらう)

而も相手もあらうに梨香<sup>リイシャン</sup>は自分の召使ひではないかと考へると美齡はいよ／＼腹が立ち、眼の前が暗くなるやうな氣持がした。

「奥さん、どうかさいますして？ 今夜はお顔の色が悪いわ」

「いゝえ、何んでもないの」

美齡は氣を取り直して殊更快活らしく饒舌つて人々の中心になるやうに努めた。朗かな愉し

い空氣が地下室に湧き立つてゐた。

さて此の地下室はかういふ具合で、南京<sup>ナンキン</sup>に於ける最も上流の婦人、淑女達を網羅する華やかな俱樂部になつたやうな觀があつたが、事實を云ふとそれに適した場所ではなかつたのだ。といふ譯は、つい數日前のこと、此の地下室を掘るために大勢の苦力<sup>クワリ</sup>が働いてゐた。そして段々穴を掘り擴げて行くうちに彼等は土中から意外な物を掘り出した。それは人間の白骨であつた。土中から骸骨が出るぐらゐは別に奇とするに足らないが、それが一つや二つでなく、十も二十も三十もだん／＼掘り擴げるに従つて幾百體とも數知れぬ無數の骸骨が累々として層を成して現はれたので、これには流石に無神経な苦力共もあつとばかり仰天し、色を變へてシヤベルを抛り出し、穴から飛び出して工事の監督者に此の事を報告したのであつた。監督も驚いて穴の中へ入つて調べて見ると成程夥しい骸骨である。骨と骨とが重なり合つて白骨ばかりで層を造つてゐる處があるかと思ふと、豎になつて埋められた儘肉は土になり骸骨だけが完全に残つて土中に立つてゐるのもある。

「コレはどうしたことだ」

監督も魂消たが、彼は代々南京<sup>ナンキン</sup>に住んでゐる故老を知つてゐたので急いで其の老人の處へ驅

け付けてそれとなく事情を話し、「いつたいあの場所はどういふ場所なのであらう」と尋ねると、老人はハタと膝を打ち、

「あゝ、それは彼處は骸骨が出る道理だ」

と云つて話したことに依ると、今から八十年餘り昔、廣西<sup>カンシ</sup>で兵を擧げた洪秀全が數年の間に全支那を席捲し南京<sup>ナンキン</sup>を占領してこゝに太平天國を樹てた。世に云ふ長髮賊の亂である。當時清朝は微力で賊を平定する力はなかつたが、倖ひにして湖南に曾國藩といふ英雄が起ち、これに英國人ゴルドン將軍が上海<sup>シャンハイ</sup>の外人軍を率ゐて曾國藩と協力して南京<sup>ナンキン</sup>を攻めたので、洪秀全も遂に支へ切れなくなり、西曆一八六四年（日本の幕末元治元年）南京城は陥落して洪秀全も死んだ。其の時、南京城<sup>ナンキン</sup>に楯籠つてゐた十萬の長髮賊が鏖殺された。此の時の殺戮は物凄いなもので、捕虜を全部纏めて地雷火の上に立たせて爆死させたと云ふことが英人の記録に残つてゐる。とにかく十萬の兵が殺されたのだ。其の死骸を埋めるのに、丁寧なことはしてゐられないから方々へ大きな穴を掘つて塵芥でも棄てるやうに死骸を抛り込み上から土をかぶせて始末をしたものであつた。何しろ十萬といふ數だから諸方へ分けて埋めたが、現在の中山東路の兩側、國民政府の附近や太平路の側、あの邊一帶へは特に澤山埋めた。かういふ事があるから、

彼處から骸骨がかたまつて出たとあれば必ず長髮賊のに相違ないといふのであつた。

「これは八十年近い昔のことでは私は目撃したことはないが、私の親などは實地に其の場を見た人で、私達の子供の頃よく話して聞かされたことだから決して間違ひはない」

と故老は附け加へて云つた。工事係の監督はそれで納得した。しかしさう事が判明すれば別に氣味悪がる必要もないと思つた。此のことを上役に報告して、骸骨を全部取り片付けるとか、此の地下室は中止して他を掘れなどと云はれるとまことに厄介であるばかりでなく、大體十萬人の死骸を埋めたといふんだから何處を掘つたつて十や二十は出て來ると思はなければならぬ、そんなことならむしろ誰にも云はないで置くほうが人の爲であると、勝手に氣を利かして考へた末、苦力<sup>ククリ</sup>共には固く口留めを命じ、出ただけの骸骨はシャベルで叩き碎いて土にまぶせて運び出し、目的通り此の地下室を掘り上げたのであつた。

しかし、それだけで此處に埋まつてゐる骸骨を全部掘り出したわけではなく、側面の壁を掘り擴げて行けばまだ無限に封じ込まれてゐるのであつた。だがそれも考へ様では何んでもないことだ。八十年むかし地雷火の上に立たせられて殺された長髮賊の兵隊共の靈魂は、地雷火と一緒に天へ吹き揚げられ、今此處に残つてゐるものは靈も魂もない單なる白骨である。土や石

と同じ物である——と考へれば別に恐がることも氣味を悪がる必要もないことで、工事監督が立派な地下室を完成させて「さあ誰でもお入り下さい」と引き渡して行つたことは然る可き處置であつたとも云へるのである。

勿論今夜こゝに集まつてゐる婦人達の中にそんなことを夢想だに考へてゐる者はなかつた。事實考へ及ばない事柄である。そして現在の南京<sup>ナキン</sup>ではいかなる地上の豪華な建物でも飛行機の空爆を免れることは不可能である。然るに此の深い窖に入つてゐれば幾百噸の爆弾を落されても生命の安全を保つことが出来るのだ。生あるものとして生命の安全感ほど貴重なことはない。連日空爆を受けてゐる南京<sup>ナキン</sup>人にとつては此の泥土其の儘の窖こそ金殿玉樓であり、感謝と親しみを持つやうになつたと云つてもそれはさう誇張ではないのである。

女達が陽氣に喋つたり笑つたりしてゐると急に電燈が暗くなつて來た。もと／＼暗い電燈が一層光が鈍くなつたので、部屋の中が薄ぼんやりとして來た。と、其の時、ラヂオが掛つて來た。誰かスキツチを入れたのだ。それは上海<sup>シャンハイ</sup>の放送で、ダンスの音樂だつた。輕快なフォックストロツトの曲が地下室に張り始めると、誰かがパチ／＼と手を叩き始めた。すると今度は踊り出した組があつた。拍手はますます／＼加はつて、次から次と踊る組が殖えた。ダンスといふも

のは楽しい時にだけ踊るとは限らない。悲しみを忘れるために踊ることだつてある。早い咄が此の地下室の土の壁から呼吸するやうな陰慘たる氣持を吹き飛ばすにはフォックストロツトより勝れた音樂はありえないのだ。しまひには其處に集つてゐる全部の人々が踊り出した。宋美齡も若い令嬢と組んで踊り出した。人々は何んといふこともなく踊らずにはゐられないやうな氣持になつて踊つた。

電燈はますます／＼暗くなつた。と、踊つてゐた一人は、突然異様な物を發見した。それは、彼女が踊つてゐる直ぐ横の壁の中で骸骨が踊つてゐたのだつた。

「きやツ」と魂切る聲を發して其の婦人は走り出した。間もなく他の人々も同じ物を見た。しかも骸骨は一つや二つではなく、無數の骸骨が壁の中で踊つてゐるではないか。

悲鳴、叫喚——中には其の場で氣絶した者もあつた。女達は皆死人のやうな顔になつて地下室から逃げ出した。人がゐなくなつた地下室では未だラヂオが鳴つてゐる。

## 三

丁度それと同じ時刻に、某所の地下室に於いて祕密會議が開かれてゐた。席につらなる者は

馮玉祥、孫科、周恩來と、それから二三日前秘密に入京した共産軍の總指揮朱徳と、他に二、三名共産系の政治家がゐた。

朱徳の南京入りは極秘に行はれたので蒋介石及び二三の人を除いては政府の要人すらまだ知らずにある程で、勿論新聞記者などが知らう筈はなかつた。山西で大敗した朱徳が何故南京へ來たのかと云ふと、それは共産軍を南京へ入城せしめようとする運動に乗り込んで來たのである。山西へ出動した共産軍は約七八萬、十萬以下の兵であつたが、日本軍のために連戦慘敗を喫して今ではせいゝ四五萬に過ぎなくなつてゐる。其の軍隊を南京へ場駐せしめ、中央軍全體を共産色に統一して、南京最後の守備を固めよといふ朱徳の策戦であり、蒋介石に對する要求である。甚だ蟲の好い註文のやうに聞えるが、實は共産軍を南京に入れよといふことは共産系によつて從來主張されてゐたことで決して寢耳に水ではない。例の救國女學生團などは譯も分らず宋慶齡にアジられて『要求共産軍入城。徹底永久抗日戰』などと書いたポスターを貼り廻つたりしたものだ。朱徳はつまり其の既定の要求を蒋介石に投げ付けに來たのだ。然るに其の結果は如何といふと、蔣はこれを拒絶した。拒絶の表面の理由は軍隊の糧食問題である。現在南京は非常なる糧食難に陥り、上海、蘇州方面の軍隊に供給する糧食だけでも不足を告げて

ゐる際に新たに四五萬の共産軍を入れては軍隊が飢餓に瀕する恐れがあるから、それは到底不可能であるといふのであつた。勿論南京の（上海、蘇州も引つくるめて）糧食難は事實である。事實位のものではなく想像以上の大窮乏である。軍隊も飢餓に瀕すれば一般人民は猶更のこと、小さな食糧暴動が隨所に起きてゐる。斯様な際、新たに四五萬の共産軍を入城させることは非常に困難であることは勿論だが、然しそれは蒋介石の口實であつた。

蒋介石は、共産黨との提携を今となつては後悔してゐる。然し後悔しようがどうしようが、一旦手を握つて日本に敵對しようと思つた以上は、一國の元首として食言は出來ぬ筈である。倒れる迄も一緒に行かうといふのが道である。だから共産軍なるものが、若し素質の良い軍隊であるならば彼はむしろ欣然としてこれを南京に迎へたかも知れないのだ。處が、事實は共産軍と來ると筈にも棒にも掛らない代物なのだ。支那の共産軍程ヒドイ軍隊は世界に無い。それは軍隊と云ふよりも巨大なる強盜殺人團だ。江西に根城を構へた時代からそれであつたが、中央軍の討伐に敵せず江西を放棄した頃から一層其の猛悪性を發揮して來た。だから支那の省民で共産主義はともかく、現在の共産軍を憎悪しない者はない。蒋介石が全國的に人望を集めたのは此の共産軍を討伐したからである。共産軍が曾て四川省へ入つた時、四川軍は之れを『山

賊』と呼んで砲撃した。這々の體で甘肅省へ遁げ込むと、甘肅でも地方自治軍から到る處で猛撃を受けた。かういふ具合に到る處で邀撃されたので、最初は五六十萬もあつた共產軍が四分五裂、遂に十分の一近くに減つてしまつた。おまけに現在ほろくな足溜りもなくルンペン同様、一所不住の境涯になり了つてゐる。もとよりこれは身から出た鏑で誰も同情する者はない。しかしかうなると愈々強盜の本領を發揮し、何處へ行つても大掠奪、大虐殺を行つた。西安の富豪張氏、洛陽の王氏一族などは其の犠牲者の大なるものであつた。今回も山西で、太原の富豪炭坑業者晋氏一族を襲つて大掠奪、大殺人を行つた。いくら掠奪は支那の軍隊に付き物でもさう無茶にやるものではない。然るに共產主義を看板に掛けて自國の良民を犬猫のやうに殺し財物を奪ふのが彼等の仕事である。朱徳にしても毛澤東にしてもつまり此の山賊、強盜團の巨魁であるに過ぎない。過日日本の二大雜誌に載つた毛澤東の自傳を讀むと、彼は嘗て青年の頃湖南で一兵卒を志願し、其の時八ドルの給料を貰つたが、それは彼が現在共產軍より受けてゐる給料より倍も多いといふことが書いてあつたが、かういふことは心ある者が讀めば大マヤカシであることは直ちに看破出来る。自ら軍の最高主腦者たる者が、受ける給料もヘチマもあるものではない。又ビタ一文取らないとしても支那を赤化しよう程の野心を持つ人間にとつ

てそんなことは問題ぢやない。それは腰辨の云ふことだ。全く子供騙しの嘘ツばかりである。要するに朱徳にしても、毛澤東にしても、正直な一部の日本人が想像するやうな立派な人間でも傑物でもない。外國では知らず支那では土匪的天才であれば立派な人間でなくても往々大將になれるのだ。朱徳、毛澤東の輩は、共產主義を汚すところの極めて惡質の土匪である。筆者は彼等が江西、福建を荒した時代の數多の有力な資料を所持してゐるが、爰では本題に關係がないから省略する。たゞ我が國の識者が、真相を没却して毛澤東ごとき奸惡の自傳を讀んで萬一にも誤られることの影響を恐れる次第である。

蔣介石は勿論此の邊の事情を知り盡してゐる。だから、共產軍を南京<sup>ナキン</sup>へ入城させるなどは以ての外と思つてゐるのだが、まさかさうも云はれないから、糧食問題に藉口して體よく拒絶したのである。

朱徳は失望した。其の結果今夜の祕密協議となつたのだが、朱徳のみならず他の列席者も蔣介石の態度については不満である。彼は共產黨と提携したと稱し乍ら、一向共產黨を重用しないのである。彼の國共提携は抗日の輿論を煽り、ソ聯の援助を頼むための手段で、實際においては共產主義をも共產軍をも容れる考へのないことが段々明かになつて來た。これでは單に蔣



のために利用されたばかり、而も瀬戸際へくればどんな背負ひ投げを食はされぬとも限らないから、先んずれば制す、此の際非常手段を取る必要があるといふのが朱徳や周恩來の意見で、馮玉祥、孫科等も大體同意した。そこで其の非常手段だが、南京附近にゐる廣東、廣西軍の一部を誘惑買収して南京城内に一大クーデターを起し、蔣介石を檻禁し、遷都を名として、蔣を南昌か若しくは西安に拉致し、其處で國民政府の旗擧げをなし、兵權は一切馮玉祥の手に奪つてしまふ。遷都後も蔣介石は檻禁して置く。次第に依つては殺してもよい——といふ筋書である。

此の陰謀を繞つて列席者が協議を凝らしてゐる眞最中、地下室の祕密の出入口の扉の背後にあたつて突然ドタバタといふ何か騒ぎが起つた。殆んど同時にピストルの音が二三發響いた。一人のボーイ風の配下が其處から顔を出して、

「スパイが潜入してゐたのを發見して捕へようとする」と逃げ出したので、只今追跡しつゝある」

と知らせた。一同は愕然とした。馮玉祥は「逃がさぬやうに大勢で追跡しろ」と命令した。後で判明つたことだが、それよりも前に此の家のボーイが一人逃亡してゐた。ボーイはスパイ

ではないが、スパイに買収されて手引きをしたので、それが發覺しないうちに逃亡したのである。

かねて警戒してゐた五六人の共産黨の配下が、ピストルを亂射し乍らスパイを追跡した。スパイの方でも時々ピストルを發射しつゝ逃げた。彈はなか／＼中らなかつた。スパイは中山東路を東へ向つて逃げて行つたが途中から左へ折れて軍官學校の方へ曲つた。そつちへ逃げるかには最早スパイの系統は云はずと知れてゐる。逃がしてなるものかと追跡隊は距離を計り三四人一度に十分狙ひを定めて狙撃すると一二彈確かに命中してスパイはバツタリと倒れた。猶側へ追ひ迫らうとすると、其の時蔣介石の官舎の禁衛兵が五六人飛び出して來たので、共産黨員も最早これ迄と踵を回らして雲を霞と逃げ去つてしまつた。

蔣介石の侍従長錢大鈞が騒ぎを聞き付けて走つて來た。丁度時を同じうして宋美齡が例の地下室の夜會から自動車に乗つて歸つて來た。狙撃されて倒れてゐる男は、便服を着てゐるけれども、軍官學校の小隊長をしてゐる陸麟春といふ少尉であつた。彼は瀕死の重傷であつたが、「自分は大元帥の命令を奉じて行動したのである。大元帥に報告すべき重大事がある」と云つたので錢大鈞は兵に命じて直ぐ陸少尉を擔いで蔣介石の地下室へ運び込ませた。美齡もそれ

に随いて行つた。

兵を立ち去らせ、側には美齡と侍従長だけが残ると、少尉は錢侍従長に背後から助けられ乍ら氣息奄々たる中から「報告」と云つて、自分がたつた今スパイして來た事實を軍人らしい簡明な言葉で細大漏らさず報告した。錢大鈞や宋美齡は顔色を變へたが、蔣介石は眉一つ動かさず水のやうな冷靜な態度で、

「陸少尉、お前は完全に任務を遂行した」と云つた。

陸は嬉しさうに合點いた。其の時、階段を慌たゞしく駆け降りて來たのは梨香であつた。梨香は殆んど死に掛けてゐる陸を見ると「わッ」と泣き乍ら其の胸にかじりついた。蔣介石の姿も宋美齡の姿も眼に入らないやうに、

錢大鈞は暗然として、無言の儘陸の身體を梨香に委ねて、自分は二夕足三足後へ退つた。梨香は激しく慟哭してゐる。宋美齡は先刻のことを思ひ當つた。

「梨香、お前が池の側で逢つてゐたのは此の人だつたの？」

と美齡は尋ねた。すると梨香は泣き顔を舉げて初めて肯いて見せた。美齡は、小孩の頃から手許で育てた梨香にこんな戀人があることを今日迄知らなかつた。陸の聲が蔣介石に似てゐた

と思つたのは矢つ張り耳のせいだつたのだ。

(もつと早く知つてゐれば夫婦にしてやつたのに)

しかし萬事終了つた。間もなく陸は絶命した。すると梨香は陸が持つてゐたピストルを手に取りるや否や、我が胸を射抜いて、一發で自殺を遂げたのであつた。

## 蘇州情話

### 一

今から二三年前蔣介石は共產軍討伐に成功して南昌にゐた。すると或日一人の女が蔣介石の陣營へ行つて、

「自分は蔣中正の糟糠の妻なにがしである。態々彼に會ひに來たのだから是非會はしてくれ」と云つた。之には衛兵も驚いた。女は歳頃四十位、貌立ち悪くはないが、何しろヒドイ落ちぶれやうでまるで乞食のやうな風體、而も手には胡弓を抱へてゐる。で(てつきり氣狂ひが)とは思つたが、よく見ると氣狂ひらしくもない。衛兵は一應叱責して追ひ返さうとしたが、女は頻りに「自分は蔣中正の昔の妻である。是非妾が來たことを中正に取り次いで貰ひ度い」と

涙を流して頼むのであつた。何しろ糟糠の妻といふ一語があるので、衛兵も脅かされ、ともかくも上官に通じた。幕僚が出て行つて應待しても矢張り同じことを云つてゐる。幕僚も處置に困り内々で此のことを蒋介石に通じると、蔣は女の名を聞いて驚いたやうであつたが「そんな女は知らぬと云つて追ひ歸せ」と命令した。幕僚が其の通り云つて歸らせようとしたが女はなにか／＼歸らうとしないで、泣き乍ら「妾は何も蒋介石に物を強請りに來たのでも頼みに來たのでもない、只彼に一目會ひたくて來たのだ。中正は知らぬと云つたといふがそんな筈は決してない、又彼はそんな薄情郎ではない、是非共正直に取り次いで下さい」と云つて終ひには喚き叫ぶ始末、漸く巡警に引き渡して追つ拂つて了つたのであつた。

支那四百餘州の獨裁者、世界の人氣者として得意の絶頂にあつた蒋介石の處へ女乞食が糟糠の妻だと名乗つて乗り込んで行つたのだから、コントラストの妙を極め、興味百パーセントの話題としていつしか世間に傳はり、支那の新聞にさへ其の話が載つたくらゐであつた。

けれども世間はいつとなく其の事も忘れてしまつた。蒋介石の前身にそんなことがあつたのかと深く詮索する人もなかつた。況んや蔣の先妻と稱する女が其の後どうなつたかといふことなどは誰も知らないのである。處が、これに就いては可成り混み入つた事情があるのであつた。

今より餘程前、少なくとも二十數年前のこと、蘇州に蘇小南と呼ぶ名妓があつた。蘇州は昔も今日も變らぬ支那第一の美人の産地、従つて其の土地の狭斜の巷には美人が多いが、蘇小南は生粹の蘇州生れで、數ある美姬の中でも一等地を抜く嬌艶、蘇州切つての賣れツ兒であつた。或る時蘇州の遊里に遊んだ蒋介石は蘇小南を見ると忽ち心を動かしたが、女の方でも蔣の厭味のない男らしさに打ち込んだので、客と藝妓とは云ひ乍ら眞實の戀愛關係が成立した。蒋介石は、日本の陸軍士官學校を卒業して〇〇〇〇第十七聯隊に見習士官として勤務中第一革命に際し風雲を望んで歸國した。革命後は一時浪人し劍を捨て、上海の實業家虞治卿の店の番頭を勤めてゐた。蘇小南を知つたのは丁度其のころだつた。二人は戀愛に有頂天になつた。元來才の利く男だから多少は遊蕩費も稼いだであらうが、遊里の金には詰るが慣ひ、番頭風情の蒋介石にさう／＼金の續くわけではない。然るに女には蘇州の生糸織物商吳泰源といふ豪商が旦那に附いてゐたので金に不自由はせぬ。旦那の吳泰源から絞つては蔣に貢いでゐた。蔣の方は純粹の間夫である。蒋介石は當時でも革命運動を捨てゝゐるわけではないから其の方にも中々金がある。其の運動費まで蘇小南が貢いだといふから、さう小さい金ではなかつた。かうした關係がしばらく續いてゐるうちに、蘇小南の旦那吳泰源が商業で失敗して破産して了つた。吳

の失敗は蘇小南に迷つたからではあるまいが、當時世間では吳は蘇娘ゆゑに千萬兩の身代を潰したと評判した。さすが蘇州屈指の豪商も身代限りの結果人生を悲觀し江に身を投じて死んだのだから末路は悲惨を極めた。蘇小南は旦那が死ぬと反つて羈絆を脱したことを喜び、それに小金も貯へてゐたのでそれを持つて蒋介石の許へ走り上海で天下晴れて夫婦になつた。

然るに蒋介石は、幾年も経たぬうちに蘇小南を振り棄て、何處かへ行つてしまつた。革命運動で多忙になつた蒋介石としては己むを得ない事情もあつたかも知れないがそれにしても人情のある態度ではなかつた。其の後彼は革命黨員陳果夫の妹陳潔如女史と結婚して經國、緯國の二男子の親となつたが此の妻とも不純な別れ方をし、最後に現在の宋美齡と結婚したのである。宋美齡との結婚が發表された時、ごう／＼たる非難が彼に對して降されたのは單に新妻が大ブルジョワの愛娘であるからばかりではなかつた。

蒋介石は遂に支那の獨裁者となつた。事實上の帝王となつた。處で一番最初の妻、所謂糟糠の妻である蘇小南の其の後の成り行きはどうであつたかと云ふと、これは甚だ氣の毒な運命であつた。彼女は蔣に棄てられてから、段々零落し、嘗ては蘇州の名花と謳はれた美貌も衰へて顧る人なく遂に破れ胡弓を抱へて道路で唄をうたふといふ憐れな境涯にまで落ちていつたのだ。

つた。

南昌に現れて蒋介石に面會を求めたのは此の蘇小南であつた。そして前記のやうな次第で追ひ返されてしまつたが、其の後南京へも二三回現はれた。性こりもなく蒋介石に面會を求めるのだつた。今では衛兵は一概に狂女扱ひをして相手にならなかつた。尤も、多少は氣も變になつてゐたのかも知れなかつた、一番最後にやつて來たのは今年の冬で、みぞれでも降りさうな寒い日であつた。例に依つて『糟糠の妻』を振り廻してしつこく搔き口説くの衛兵は蒼蠅く思つたか、それとも誰か命令したのか、「手におへぬ狂女だ」と荒繩でひつく／＼つた上、二三人で城外の野原へ連れて行つて打つやら蹴るやらして棄て、歸つたのであつた。憐れな蘇娘は縛られた上に踏んだり蹴たりされたので今は息も絶えなんとしたが、それでも破れ胡弓のみは力をこめて緊と抱いてゐた。日は暮れ掛り、紫金山おろしの寒風が身を刺すばかりである。さうしてゐる處へ數頭の野犬が來て蘇娘を食はふとした。紫金山には狼が棲んでゐると云ふが、實際は狼でなく野犬である。然し野犬でも此處らのは飢えてゐる時は人間を食ふから狼も同じことである。蘇娘は手脚を縛られてゐるので今にも野犬に咬み殺されさうになつた處へ、折よく一人の老僧が通り掛つて犬を追ひ拂ひ蘇娘を助けて呉れた。老僧は憐れに思つて彼女の縛めを

解き、つくぐと顔を眺めるのであつた。

「計らずわしが通り合せたゆゑ、犬に食はれようとするそなたを助けて進ぜたが、見れば手脚に縛めが掛つてゐる。仔細は分らぬが、胡弓を持つてゐるところを見ると、貧しい藝人でもゝるか、それにしても何か深い譯があらう」

と尋ねた。蘇娘は漸く氣も確かになつたので老僧の顔を見ると、蘇州にゐた頃屢々見たことのある寒山寺の老和尚であつた。

「あなたは寒山寺の和尚様」

「わしを寒山寺の老衲と知つてゐるそなたは誰ぢや」

「わたしは以前蘇州の色町にゐて蘇小南と申した者、今は零落して此の通り乞食婆アになりました」

「さう云へばわしも思ひ出した、よくあの邊へ托鉢に行く頃そなたに會つた覚えがある——然し蘇小南と云へば蘇州でも名高かつた美人、わけて色里の女は美人であればあるほど罪業が深いとは申すが、蘇娘ほどの美人が、いかに罪業深いとて、南京ナシケンの城外、かゝる野原に縛られて犬猫同様棄てられるには、必ず深い譯でゝらう。あらまし愚僧にお聽かせなさらぬか」

深切な老僧の言葉に、蘇娘は泣く／＼自分の身の上をした。蒋介石との戀の顛末、又、吳泰源から愛されたこと、吳が破産して江に投身したこと、それから、南昌へ初めて蒋介石に會ひに行つたこと、南京ナシケンの蒋介石の衛兵に縛されて野原へ連れて來られて棄てられたこと——など詳細に物語つたのであつた。

寒山寺の和尚は、口の中で經文をとなへ、念珠つまぐりながら一々聽いてゐたが、やがて徐ろに口を開き、

「それは氣の毒なことであつた。しかし極樂淨土ならともかくも、罪から罪のこの現世では、南京ナシケンの大將軍たる蒋介石が昔を忘れてそなたを虐待したことも、やむを得ぬことかも知れぬ。そなたの今の身で蒋介石に飽く迄面會をと云うて見たところで及ばぬことだ。實はわしは今日は紫金山の奥の紫霞洞といふ禪寺に用事があつて行つた戻り道、今夜の汽車で蘇州へ歸るのだが、そなたも蒋介石への煩惱を絶つて、わしと一緒に蘇州へ行つてはどうぢや。故郷のことだから、何彼と人の慈悲もあらうといふもの」

と諭されて蘇小南は、未だ蒋介石に對する執着を絶つたわけではないが、此の儘れば死ぬより外はないから、寒山寺老和尚の情けの袖に縋つて一先づ蘇州へ行つたのであつた。

蒋介石は上海の戦線が亂れ收拾すべからざる状態に陥つたので自ら督戦の必要を感じ、急遽蘇州へ向つた。宋美齡も同行した。

日本軍の南京總攻撃はこれからである。すでに海陸の大包圍陣は完成し、南京は孤立の運命にある。蒋介石が蘇州へ出張して督戦したところで戦局を支那に有利に轉回することは不可能である。然し南京でも上海でも目下蒋介石逃亡説が盛に流布されてゐる。いくら打ち消しても事實逃亡したかの如く信じてゐるので、南京の威信も今や地に落ちてしまつた。それ故蒋介石としては自己の健在を知らしめるためにも是非共戦線の將領と會見する必要があつたのだ。

蘇州へ到着すると、前線からは、張發奎、白崇禧、陳誠以下の將領が集つてゐて、城外の寒山寺で重要軍事會議を開いた。寒山寺は例の『楓橋夜泊』の詩によつて有名だが實際は久しく朽廢してゐたのを近年漸く修復したばかり、寺としては粗末なものだが場所が密議には適してゐるので此處を利用したのでつた。將領との會議の最中に、英、米二國の有力者二三名がこゝへやつて來たので蔣は別室でこれら外人とも會見した。宋美齡が通譯に當つた。そして會見が

終つて歸つて行く外人を蒋介石と宋美齡は山門の外迄送つて出た。

其の時であつた。一人の女乞食が何處かから飛び出して來て、蒋介石の前に跪くやうにし、彼の脚に緊としがみついたのであつた。

「あゝ、お前は蔣中正だ、やつとお前に會ふことが出來た、わたしは蘇小南だよ、よもやわたしの顔を見忘れはしまいな……わたしはお前に會はふと思つて、南昌へも行つた、南京へは何度行つたか知れやしない、けれどもいつも無情な兵隊がお前に會はしてくれなかつたのです。わたしはお前を恨みはしない、お前はそんな薄情郎ではない筈だ……お前がわたしを打棄つて何處かへ行つてしまつたのは、やむを得ない事情があつたんでせう、でもわたしはどんなに泣いたことだらう……」

蘇娘は泪に濡れ乍ら蒋介石の顔を振り仰いで云つた。彼女の髪は昔は柳條を梳つたやうに美しかつたが、今では冬の枯れ草のやうな色をして、カサ／＼と乾いて、すり切れてゐた。其の眼は一ト目で異性の心を蕩かし、朱い唇は魂を搔きむしつたのに、今は瞳は黄色く混濁し、唇は乾あわびのやうに色も香もなくなつてゐる。あゝこれが其のむかし蘇州の紅燈の巷で嬌艶一世を壓し數多の蕩兒を惱殺した蘇小南の成れの果であらうか……。しかし蒋介石は、零落衰殘

の女の貌の何處かに名残りを留めてゐる昔の面影を發見して内心駭いたのだつた。

それよりも一層駭いたのは周圍にゐた人々だつた。人々は蒋介石と蘇小南を見、更に視線は期せずして宋美齡に注がれた。宋美齡も一時は驚いたが、しかし彼女は蘇小南のことはよく知らなかつたし、又あまり突然の出來事だから單なる氣違ひ女だと思つた。

「誰か其の氣違ひ女を向うへ連れて行つて下さい」

蘇娘は蒋介石を捉へた手を放さず、ハツタと宋美齡を睨んだ。

「お前は何んだ、よくも妾を氣違ひ女だと云つたな、妾はかう見えても蔣中正の糟糠の妻だよ、ハ、ア、お前が宋美齡とやらだネ、宋美齡が何んだ、金持の娘が何んだ、お前だつて落ちぶれりや妾と同じ様になるんだ、お前なんぞちつとも恐くないんだよ、誰が何んと云つたつて妾や蔣中正の妻なんだから」

「貴郎早く蹴飛ばしてお仕舞ひなさい」

蒋介石は誰か早く蘇娘を引つ立て、呉れ、ばい、と思つたが周圍の者は呆氣に取られてゐるばかりで氣が付かなかつた。蒋介石は良心の苛責を感じた。彼は今日の地位を築くまでには多くの人を踏み虐げて來た。それは女ばかりではなく男に對しても同様であつた。一旦血をす、

つて兄弟を盟つた同志でも、立場を異にし、利害が相反して來た時には用捨なく相手を打倒した。胡漢民に對する彼のやり方などはつまりそれであつた。胡漢民はそれがために遂に憤死した。世間で知らないことにはもつと残忍なことを澤山して來てゐる。しかし彼はさうした自己の行爲を省てもさう疚しくはない。所詮英雄の事業には澤山の犠牲が必要である。たとへばそれが利己的な行爲であつても、少なくとも「國家の爲だ」といふ口實がある。實際彼はさう確信してゐるのである。支那の國家を救ひ得る者は自分より他にない、其の自分に反對する者は國家の賊である——と。

然し、男に對してはそれでも通るが、女の問題は困る。弱い女を踏み臺にし揚句の果は振り捨て、不幸に陥れたことを「國家の爲」とは云はれない。それは世間も許さないし、自分の良心も許さない。蘇娘が南昌へ尋ねて來たことを聞いた時には心の古創が痛んだ、然しどうしやうもなかつた。

宋美齡は憤然として奥へ入つてしまつた。やがて衛兵が側へ來て、泣き叫び喚き罵る蘇娘を引き離して何處かへ連れて行つた。蒋介石は態と平然たる態度を粧つて寺の奥の部屋へ戻つて來ると、美齡は蒼ざめた顔をして、兩眼を吊り上げ、激しく手を顫はせ乍らテーブルの側に立

つてゐた。

「貴郎、今の有様は何事です」

「あれは狂女だ」

「狂女なら狂女だと、何故あの場でハッキリ仰しやらなかつたのです。あなたは中國の元首です。乞食女とどういふ因縁があるんです。わたしの體面も傷つけられてしまひました」

「美齡、何も騒ぐ程の問題ぢやない」

「否え、大問題です、直ぐ様あの女乞食を銃殺してお仕舞ひなさい」

「莫迦なことを云へ」

「ぢや、わたしが命じて來ます」

宋美齡は腹立ちまぎれに飛び出して行つた。蔣介石は止めるわけにもいかなかつた。獨りで部屋の中の椅子に腰を掛け宋美齡のことと、蘇小南のことを考へてゐた。

「俺だつて今に乞食になるのだ」と彼は呟いた。

宋美齡は山門の側迄行つたが、最早そこには衛兵のほかには誰もゐなかつた。暫くの間黙つて其處に立つてゐると、一人の外人が自動車を走らせてやつて來て山門の前で車を停めた。見る

とそれはジョンソンと云ふアメリカの若い飛行士だつた。飛行士が自動車から降りようとする前に宋美齡は其の側へ行つて、

「ジョンソンさん、わたしを乗せて下さい」

「奥さん、何處へ入らつしやるんですか？」

「何處でもいゝの、とにかく車を廻して」

宋美齡は操縦席へ飛び上るやうに乗つて並んで腰掛けるが否や命令するやうに云つた。飛行士は何んだか譯は知らないが彼女のたゞならぬ様子を見て其の儘車を回旋させ寺の門前を今來た方へ走らせた。蘇州城外には隙き間もなく軍隊が充滿してゐた。縦横に通じてゐる石の太鼓橋の架つた水路にも、軍用のジャンク船以外には平時のあの長閑な支那大陸の旅を思ひ出させる民船の姿は見えず、さう云へば城外の街も大抵の店舗は大戸を閉め切つて家族は避難してしまつたらしく、女や子供は一人も見えないで、道路を右往左往してゐるのは苦力クワリのやうな人間ばかりだつた。

宋美齡は無性にイラ／＼してゐた。「お前だつて落ちぶれりや妾と同じ様になるんだよ……」  
氣狂ひ婆さんが齒をむいて罵つてゐた顔が眼に見える。太平路の地下室で見た骸骨の踊り。リッ梨



香シヤンの死——ろくでもないことばかり頭の中に渦巻いてゐる。

眼の前をまつ黒い雲がとざしてしまつたやうな氣持がした。坦々たる國道が大陸の果迄通つてゐる。遙か遠方で轟然たる爆音が響いた。飛行機の爆彈投下だ。

「ミスタ・ジョンソン、全速力を出して——」

宋美齡は自動車を全速力で走らせることが、眼を遮る不愉快な暗雲を突き破る手段であるやうに思つた。

忠實な青年飛行士は命ぜられる儘に無茶苦茶に自動車を突つ走らせた。運河の船や橋がうしろへ飛んだ。白い壁の家が飛んだ。塔が飛んだ。雲が飛んだ。

と、其の國道を、眠り乍ら歩いてゐるやうにフラ／＼と歩いて来る女乞食があつた。破れ胡弓を大切さうに小脇に抱へ乍ら魂の無い人間のやうな足取りで——。それは蘇小南であつた。

飛行士は遠くから警笛を鳴らしたが反響がなく、蘇娘は往來のまん中を歩いて来る。

「チエツ、乞食婆アメ」

飛行士は最初車を左側へ避けようとした。すると蘇娘も同じ方へフラ／＼と寄つて來たので危うくハンドルを右へ廻した瞬間、蘇娘が同じ方向へよろめいて行つた。

「あッ！」

飛行士が叫んだ時、自動車は人間を轢いて激しく飛び上つた。道路には眞つ赤な血が飛び散つた。車は傾き乍ら運河の方へ突つ走つて行つた。若い飛行士は極度に狼狽し、ハンドルを切らうとしたが及ばなかつた。自動車は、宋美齡とアメリカの飛行士を乗せた儘運河の中へ飛び込んでしまつた。

昭和十六年四月二十五日印刷  
昭和十六年五月一日發行

藝能叢書(2)支那風物記  
定價 一圓五十錢

著者 村松梢風

發行者 京都市河原町蛸藥師下ル 河原武四郎

印刷者 京都市柳馬場三條下ル 福井松之助



製複許不

發行所

京都市中京區  
河原町蛸藥師下ル

河原書店

電話本局②六八四七番  
振替 京都市二一五八番  
大阪五四三八番

堂本印象著 **看心有道** 定價 二圓五十錢  
十四錢

好評第六版出來、口繪コロタイプ、原色入、挿入寫眞四十五、現代日本畫壇の覇者、印象畫伯の繪と隨筆集

西堀一三著 **千利休** 定價 二圓四十錢  
十四錢

現代の茶道は利休の茶道に還るべきである。千利休の傳記と日本の茶道を研究するには最高の書である。

大江素天著 **人生三世紀相** 最新版 定價 一圓五十錢  
十錢

大阪朝日新聞記者として長年活躍せる著者が、陰退生活の中より青年時代、成年時代、老年時代の三世紀に分けて新體制下に於ける青年に與へる好著、又一般讀物としても感銘深きものがある。

京都市河原町蛸藥師下ル  
振替 京都二一五八番

河原書店發行

773  
146

KI40-75

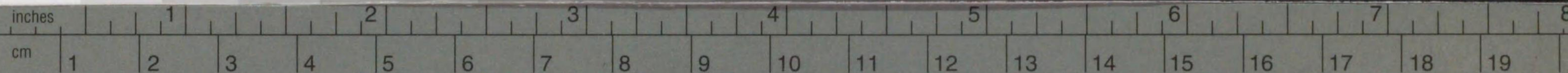
河原  
書店

# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

